艦隊悪堕ち計画6
奪われた好意

「ただいまお散歩から戻りましたぁ～♪」
「もうすぐ夏ですね！夜になったのに少し汗かいちゃいました♪」
「ワンちゃんも楽しかったみたいですよ♪いっぱい色んな人を笑顔にして♪」
「ほら、ちゃんと帰ったらご主人様にご挨拶しないとダメだよ！」
もー、いつもちゃんと教えてるのにぃ！」
チル！
スリ～

「そうそう♪ちゃんとご挨拶できて偉いねー♪
提督はもう人じゃなくて照月のワンちゃんなんだから
ちゃんと言うこと聞かないと捨てちゃうよ♪」
「ふふっ♪じゃあ、ワンちゃんを犬小屋に戻してきますね…って、どうしたんですかご主人様？」
「えっ!?今夜は照月がご主人様のお相手をするのですか!!わあ♥本当ですか！」
「やったよ提督！ご主人様が照月のことを抱いてくれるんだって♥あっ、そうだ♪」

「提督♪犬小屋に戻る前にご主人様が挿入しやすいよう
照月の準備を手伝ってくれる？もちろん手伝ってくれるよね♥」

シャラ…

「あっ♥いいよ♥パンツの上からペロペロ舐めて照月のおマンコを沢山濡らしてね♥」
「直に舐めちゃダメだよ♪照月に許可なく触っていいのはご主人様だけなんだから♥」
「いひひ♪こうしてると本当のワンちゃんみたい♥」
「んーん、自分じゃない人のセックスためにに女の子のおマンコをペロペロしてるなんて
ワンちゃん以下のゴミくずだよね♥」
ぺちゃぺちゃ
ちゅっ
ちゅぽ

「あんっ♥すっごいハアハア言ってる♪照月になじられて興奮しちゃったのかな？」
「そうだよね♪提督はお散歩中もみんなに笑われて泣きながら勃起してるくらいの変態ワンちゃんだもんね♥」
んっ♥
「今だってほら♪その情けないおチンポを勃起させて…もしかして照月とシテみたいの♪」
「あはは♪ワンちゃんの癖に何言ってるの♪昔ならともかく今の照月はご主人様のモノで、提督とは絶対にセックスなんてしないよ♥」
ちゅっ
くちゅっ
ちゅぱっ
ルルルルルルルル

「んっ、あっ、あっ♥…ふふっ♪もう十分かな♪」
「もういいよ提督♥照月のおマンコ、もう十分濡れたから♥」
「ほら、早く退いて！照月は今からご主人様に抱いてもらうんだから♥」
「ふふっ♪じゃあご主人様♥最後の準備があるからちょっと待っててくださいね♥」
じわぁ

「お待たせしましたご主人様♥もう照月は準備万端ですので、いつでも挿入できますよ♥」
「えっ、なぜわざわざ元の姿に戻って散歩に行ったのかですか？」
「クスッ♪だってその方が楽しいじゃないですか♪
元秘書艦に首輪をつけられて散歩されてる提督の悔しそうな顔、最高ですよ♥」
ドクン…♡
「えー、酷いですよ！照月をこんな女にしたのはご主人様じゃないですか♥
そ、それ、より♥早くご主人様のおチンポをください♥」

「んあああぁぁぁんっ♥♥入ってきましたぁ♥」
「さすがご主人様のおチンポ様ぁ♥照月のおマンコにピッタリです♥」
「そこの短小おチンポのワンちゃんとは大違いです♥」
「あっ、ごめんね♥比べることが間違ってたね♥提督がご主人様に勝てるわけがないよね♥」
そこ♥ダメ♥
ひゃ!!ぅぅ♥

「あっ♥あんっ♥やっぱりすごい！照月の赤ちゃんの部屋まで届いて無理やりこじ開けてくる♥♥」
「あっ…ううんっ♥ダメェ！気持ちよすぎて照月変になっちゃうよぉ♥」
「こんな素敵なおチンポで貫かれたらどんな艦娘だってご主人様にメロメロになっちゃう♥」
はっ♥
あっ♥
「はっ♥はっ♥あぅんっ♥ご主人様ぁ♥照月のおマンコにせーしください♥」
すちゅ♡すちゅ♡
ぐちゅ♥ぐちゅ♥
じゅぽ♡
「照月もうイッちゃいそうです！」

「あっ、あっ、あああああああああああああああああああああああああんんっっ♥♥♥」
「…っ、はあっ♥はあっ♥しゅごい…照月の中に入りきらなくてせーしがあふれてきてる…♥」
「もっとお…♥もっとください、ご主人様ぁ♥」
「…ふえっ？ワンちゃんを犬小屋に戻さなくていいのかですか？」

「あんっ♥せっかく盛り上がってきたのにい…そうだ♪」
「提督♪一人で戻れますよね♪」
もし、寄り道したり変なことをしようとしたら秋月姉に言いつけちゃうから！…いひひ♪」

ブビュビュビュ
ビュビュビュ
ビュビュビュ
ビュビュビュ

「せっかく、折角ご主人様が抱いてれるんですから、照月もちゃんと本当の姿にならないと♥」
「んっ、あぁんっ♥この快楽が全身を駆け巡る感じ♥」
「照月の体と心がご主人様で満たされてるみたいで、やっぱりこっちの姿のほうが照月は好きです♥」
「いひひ♪準備完了です♥」

「あら、ようやく目を覚ましたの司令官？相変わらずダメダメな人ね♪」
「えっ、この人？響に聞いてないの？この人が暁たちの新しい司令官、つまりご主人様よ♥」
「司令官が悪いんだからね♪響の命令に逆らって暁たちを逃がそうとするから、
ご主人様が直々に暁たちを教育してくれたのよ♪」

ドヤッ！

「そしてご主人様に逆らった司令官には
新しくご主人様の奴隷艦になった暁たちがもう一度現実を教えてあげることになったの♪」
「これから毎日、自分の大切な艦娘が自分以外に犯されてるところ見ながら
自分の無力さを思い知りなさい♪」

「まずはご主人様が挿入しやすいようにストッキングを破るわね♪」
「クスッ♪どうしたの司令官、そんなに暁のパンツを見つめて？」
やっぱり響が言ってた通り司令官は変態さんなのかしら♪」
「これからこのパンツの中にある暁の〝おまんこ〟にご主人様の〝おちんぽ〟が入るのよ♪」
ビリッ
「羨ましい？司令官も入れてみたい？……クスッ♪ダメに決まってるじゃない♪」
「一人前のレディである暁に司令官のおちんぽは相応しくないわ♪」
相応しいのは男らしいおちんぽを持ったご主人様だけ♥」
「さあ、ご主人様♥司令官にもう暁が子供じゃないって証明してあげましょう♪」
ビリッ

「んっ！くううううっ!!!
…ど、どお！ご主人様のおちんぽをちゃんと受け入れることができたわ！」
「ご主人様♥暁のおまんこはちゃんと気持ちいい？」

「クスッ♪当り前じゃない！暁はもう大人のレディなんだからね！」
「えっ！もう動くの!?ちょっと待って！挿入したばっかりで敏感だから最初はゆっくり…」

「あっあああああんんんっっ!!!あんっあっはうぅっ♥」
「ダメェ！いきなりおちんぽズボズボ入れられると何も考えられなくなっちゃうぅ♥」
「あんっ♥あっ♥息できない！…でも気持ちいいわ♥あっ、ああんっ♥」
「暁は立派なレディだからご主人様を気持ちよくしてあげないといけないのに♥
これじゃ私だけ先に…！」
あんッ
あっ♥
ぐっぐっぐっ
ずちゅずちゅ
ぐぼっ

「ふぇ？どうしたのご主人様？…あっあぁんっ！どうしておちんぽ抜いちゃうの…」
「ご主人様を差し置いて一人だけでイク気かですって？そっそんなわけないじゃない！」
ハーッ♥
ハーッ♥
ハーッ♥
「そ、それよりご主人様♥
司令官に暁が立派なレディになった姿を見せたいのだけれどいいかしら？」
「えへへ♪ありがとうご主人様♥」
ぶぶぶんっ

「司令官は暁たちをまだ子供だと思っていたみたいだけれど
もう暁たちは立派な大人の女になったの♥」
「最初は苦くて飲めなかったせーしを飲めるようになったり♥
暁のおまんこが壊れるまでせっくすをして、赤ちゃんができるくらい中に出されたり♥」

「子供扱いする司令官の元では知らなかった
大人の女性の楽しみ方をいっぱい教えてもらったわ♥」
「よ～く見ててね司令官♪これが暁がご主人様に教育してもらって立派なレディになった姿よ♥」

「クスッ♪どうかしら司令官？とってもスケベで立派なレディになったでしょ♪」
「最初はおっぱい丸見えなこの服も少し恥ずかしかったけれど――
ご主人様に喜んでもらうとっても幸せな気分になってくるのよ♥」

くちゅぁ♡

「いっぱい揉んでもらったから少しおっぱいも大きくなったし
おまんこなんて少し動くだけで服が食い込んでくるから
気持ちよくてお汁がいっぱい垂れてくるし♥」
「ご主人様ぁ♥もう我慢できないの！いつもみたいに暁が気絶するまでおまんこしてぇ♥」

「あぁぁぁんっ♥♥さっきより濡れてるからスムーズにおちんぽが挿入ってきたわぁ♥」
「ああんっ♥男の人のために最高に気持ちよくなってもらうのはレディとして当り前じゃない♥」
「暁のおまんこもお口もおっぱいも、全部ご主人様を気持ちよくする道具なんだから♥」
「ご主人様ぁ♥早く突いてぇ♥暁もいっぱい締め付けて気持ちよくするから♥」

「あうんっ♥あっ♥あうっ♥気持ちいい♥
暁のおまんこをゴリゴリ突いてきて、またおまんこ広がっちゃう♥はあんっ♥」
「最初は入り口に挿入れただけでも痛かったけれど
今では半分くらい余裕で入れてもらえるようになったわ♥ああんっ♥」

あんッ

あっ♥

「あっ、あっ♥ダメぇ！もうこのおちんぽ無しの毎日なんて考えられない♥
ご主人様ぁ、好き♥だ～い好き♥」
「司令官、ちゃんと見ててね今日は徹夜でせっくすするから♥目をそらしたら覚悟しなさい♪」
「んっ、あんっ、やあんっ♥あっ、ああんっ♥あっ、あっ、はうっ♥やっ、んうっ、あうんっ♥♥♥」

ぐっぐっ

ずちゅずちゅ

ぐぽっ

〜5時間後〜
「はあっ♥はあっ♥はあっ♥…えへへ♥ご主人様のせーしでお腹いっぱい…♥
まるで赤ちゃんができたみたいね♥」
「司令官にはこんなこと絶対にできっこないでしょ♪」
ハ！ッ♥
ハ！ッ♥
ハ！ッ♥
ドキ…♥
ぼて…♥
ぷっくり…♥
ポポ…
「ちゃんと自分の立場を理解できたかしら司令官？男としても司令官としてもあなたは0点♪」
「今日はもう自分の部屋に帰っていいわよ♪明日は雷と電の番だから楽しみにしててね♥」
「じゃあご主人様♥暁たちは一緒にシャワーを浴びて一緒に寝ましょ♥バイバイ司令官♥」

「またこんな所でするんですか？」
「いいえ、文句なんてありません！ですからお願いです、このことは提督さんには内緒にしてください！」

ぴたッ

「…はい…どうぞ、由良のおマンコをご自由にお使いください…」
「はい…そこの鏡に手をついてお尻を向ければいいんですね…わかりました…」

まりまり

「これでいいです…えっ！あっ、んあああぁぁぁぁんっ！」
「い、いきなり入れないでください！あんっ！やっぱり大きすぎてキツイ…です…」

「えっ！『あの男は女も満足させられないヘタレ粗チン提督』そ、そんなことないです！」
「提督さんはあなたみたいな女の子を性処理の道具にしか思ってない人とは違います！」
「それに提督さんはきっとあなたなんかより大きいはずです！…見たことはありませんけど…」

「あ、ああんっ！きゅっ、急に動かないでください…あんっ、あっ、はうっ！」
「あっ、あっ、んうっ！ダメ！そんなに激しく腰打ち付けないでください！あっ、ああんっ！」

あっ

あんっ！

「ダメェ…コレされるといつも頭が真っ白になって何も考えられなくなる…ああんっ！」
「あっ、あっ♥考えちゃいけないのに気持ちいいのが止まらない…はあんっ♥」

ズボ
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ

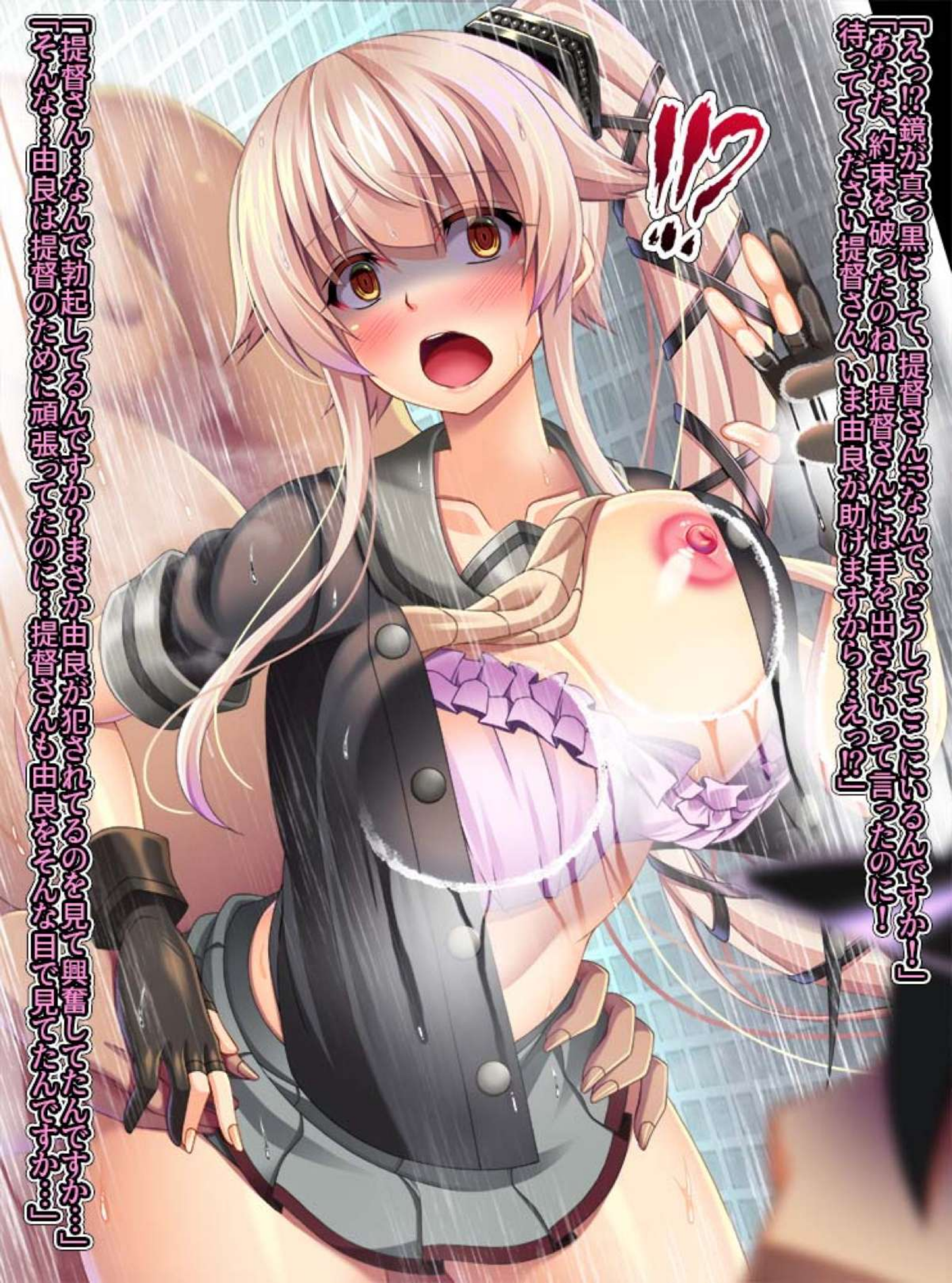
「ふぇっ…なんでやめちゃうんですか？こんな中途半端で止められたら…」
「えっ!?続きをして欲しかったらあなたに忠誠の言葉を言えっ!そ、そんなこと言うはずがないです！」
「由良を大切にしてくれた提督さんを裏切ることはできません！
たとえ体は好きにできても心までは屈しません！」

ぞくぞくぅ♡

「えっ、『その男も由良をエッチな目でしか見ていない』そんなはずありません！」
「提督さんはそんな人じゃありません！」
「そんなに信じてるなら鏡を見てみろ？何をいってるんですか？」

ごりゅ
ごりゅ

「えっ!?鏡が真っ黒に…て、提督さん…なんで、どうしてここにいるんですか!」
「あなた、約束を破ったのね!提督さんには手を出さないって言ったのに!」
待っててください提督さん、いま由良が助けますから…えっ!?」



「提督さん…なんで勃起してるんですか?まさか由良が犯されてるのを見て興奮してたんですか…」
「そんな…由良は提督のために頑張ってたのに…提督さんも由良をそんな目で見てたんですか…」

「…もういいです…提督さんもこの人も同じなら由良はより気持ちよくしてくれるおチンポの持ち主に忠誠を誓います…」
「ごめんなさい提督さん…でも、その小さいおチンポじゃもう由良を気持ちよくすることはできないと思いますから」
「由良はもう後戻りができないくらいエッチな体に改装されて、このおチンポがないとダメなんです」
「この人と出会った時から、由良の運命はもう決まっていたんですね…」
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン

「んっ♥これが…新しく生まれ変わった由良？」
「すごい！体中から力が湧いてきておマンコもさっきと比べ物にならないくらい気持ちいい♥」
「こんな素敵な改装をしてくれるなんて、あなた…いえご主人様♥ありがとうございます♥」
「提督さん、どうですか生まれ変わった由良は？とっても素敵になったよね、ね♥」

ぞくぞくぅ♥

「由良は素敵な改装をしてくれたご主人様と由良を気持ちよくしてくれるおチンポ様に絶対の忠誠を誓います♥」
「どうぞ、由良の体をお好きなように使ってくださいね♥」

ぐにゅぅぅ♥

「あはあぁんっ♥あぁんっ♥あっ、あっ♥はうっ♥すごいですご主人様♥おマンコ気持ちいいです♥」
「何度もご主人様に犯されてるうちに由良の体はいつの間にかご主人様専用の体になっちゃったんですね♥あはぁんっ♥」
「あっ♥ソコいいです♥子宮の入り口ジュボジュボされるの気持ちいいです♥あっ、あぁん♥」

あっ

あんっ！

「こんな深いところ提督さんの粗チンじゃ絶対に届かないです♥はあんっ♥」
「今までこんな粗チン提督さんのために頑張ってたのがバカみたいです♥」
もっと早く自分に素直になってればよかった♥」

ズポ ズポ ズポ

ぐぱぁ ぐぱぁ

『ふぇ？・どうしましたご主人様？・・・えっ、あっはぁぁんんっっっ♥♥』
『あんっ♥すごい！腰さらに激しくなりました♥あぁんっ♥こんなに激しいの知らない♥』
『ダメェっ♥頭真っ白になって気持ちよさと幸せだけで由良が一杯になっちゃうぅ♥はあんっ♥』
お゛っ♥
はっ♥
お゛うっ♥
はっ♥
『しゅきぃ♥乱暴にされるのしゅきです♥
ご主人様、もっと由良を道具みたいに乱暴に使ってくださいぃ♥』
『あっ、あっ♥ダメダメぇ！もっと気持ちいいことしたいのに由良、もうイッちゃいそうです♥』
『ご主人様も由良の膣内に一杯せーしください♥一緒にイこ♥ね♥ねっ♥』
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽ

「あっはあああああああああああんっ♥♥♥…っはあっ♥はあっ♥」
「…うふふ♥由良のお腹…あちゅいです♥ヤケドしちゃいそう♥」
「あっ！ご主人様のおチンポ♥大きいままで由良の膣内でピクピクしてます♥かわいい♥」
「もう一度しますか？…はい♥次は湯船でしましょ♥」
そのあとは由良の体を使ってご主人様を洗ってあげますね♥」

ひくひくひくひくっ

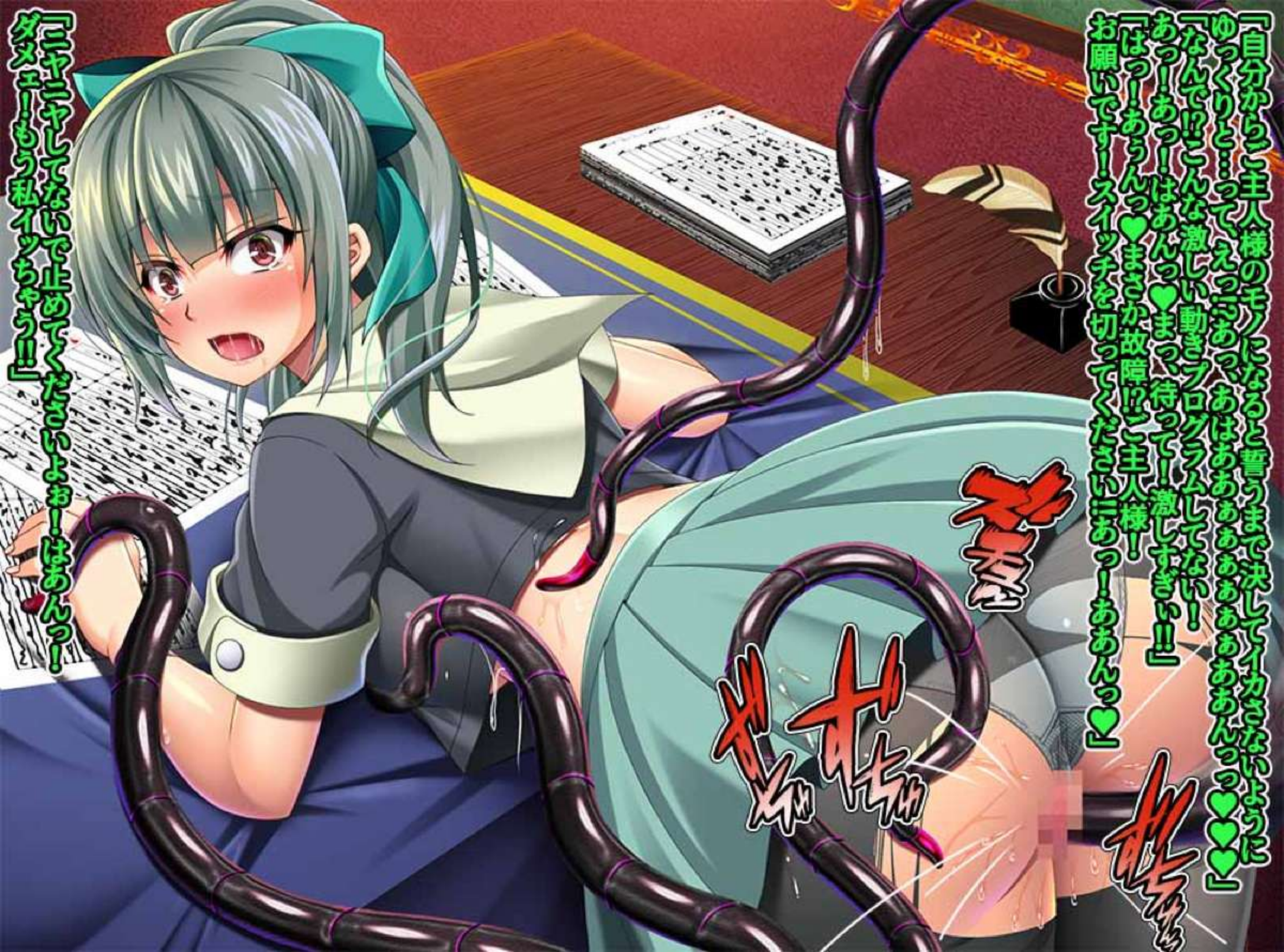
「提督さん？もうそんな人どうでもいいですから♪それより早く続きをしましょご主人様♥」
「いつまでも覗いてないで早く消えてくださいね♪バイバイ提督さん♥」

ブッビュルビュビュ
ビュビュビュ
ドクドクドクドク

「失礼しまーす！新しくきた娘達の改装データと改装用の新型を持ってきました！」
「書類は後でいい？先に私で新型のテストをするんですか？」
「それは構いませんけど、ここでしてもいいんですか？多分汚れちゃいますよ…はい、わかりました。では、早速試してみます！」
「っとと…すみません、ちょっと手伝ってもらってもいいですか？一人だとやりづらくて♪」

「きゃっ！……もお、相変わらず乱暴ですね♪
わざわざ破らなくても命令があれば脱いだのに♥」
「本当にストッキングを破くの好きですよね♥
まあ、そういう所も好きですけど♥」
ビリッ
ビリッ
「えーと、対象の艦娘の準備ができたら次は…はい！
そこのスイッチを押してください！」
「そうしたら、センサーが自動的に艦娘を感知して改装にかかります♪」

「んっ…あんっ♥こうやって最初は優しく色んな所を優しく愛撫していきます♥」
「おっぱいやおへそ、首筋や背筋、おマンコにお尻♥艦娘によって性感帯が違いますから、そこを探り出します～♪」
「そして見つけ出したら、ソコを重点的に愛撫していきます♥ちなみに私は背筋が弱いです♪…ふふっ、知ってますよね♥」
「ある程度艦娘の好みがわかったら媚薬入りのローションを性感帯やおマンコに塗りつけます～♪そしてそれが終わったらいよいよ挿入です♥」
ギイイ!!
ズリュ
ギイイイ
ニチャ


「自分からご主人様のモノになると誓うまで決してイカさないようにゆっくりと…って、えっ!?あっ、あはあぁぁぁぁぁぁあんっっ♥♥♥」
「なんで!?こんな激しい動きプログラムしてない!あっ!あっ!はあんっ♥まっ、待って!激しすぎぃ!!」
「はっ!あうんっ♥まさか故障!?ご主人様!お願いです!スイッチを切ってください!あっ!ああんっ♥」
「ニャニャしてないで止めてくださいよぉ!はあんっ!ダメェ!もう私イッちゃう!!」
ズチュ
ずぷ
ずぷ

「んっんんんうううっ♥♥♥はあっ♥はあっ♥」
「コレはまだ実用は無理みたいですね…もう少し改良が必要みたいです♥」
びくん♥
びくん♥
「それよりも酷いですよご主人様♥今更スイッチを切られても
私イッちゃったじゃないですかぁ♥」
「せっかく今日はおチンポもらえると思ってオナニー我慢してたのにぃ♥」
びくん♥
ブッシャアアア♥

「もぉ！今日のお仕事は終わりです！書類は明日読んでください♪」
「私を機械でイカせたお詫びに、今日はたっぷりおマンコしてくださいね♥ご主人様♥」

「ふふっ♥やっぱりこっちの姿のほうが解放感がありますね♥」
「あの姿のほうがみんな簡単に騙されてくれて改装させてくれてるから便利なんですけどね♪」
「それよりご主人様ぁ♥早くおチンポください♥ほら、私のおマンコ、トロトロで食べごろですよ♥」
「私の子宮めがけていっぱいご主人様の精子を撃ち込んでください♥」

「んあああぁぁぁぁぁんっ♥♥キタキタァ！
主人様のおチンポ入ってきたぁ♥」
「突きされるたびに全身を貫く様なこの快感♥
機械や他の男では絶対に味わえないわぁ♥♥」
「あっ♥あっ♥あぁんっ♥イイ！気持ちいい♥あっ！そこイイです♥
膣内グリグリ好きぃ♥」
ぬぷっ…
「このおチンポもらえるなら昔の仲間なんていくらでもご主人様の奴隷に
改造しちゃいます♥」
「ご主人様も気持ちいいですか？…って何持ってるの!?…まさか！」

「ひあぁぁぁぁんっ♥ダメェ♥背筋と一緒に突かないでぇ♥頭おかしくなっちゃうぅ♥」
「あっ♥はあっ♥すごい！コレすごい♥あっ、あっ♥こんなのされたら女の子は絶対に逆らえなくなっちゃう♥」
「肌が触れてないところまで空気に触れるだけで感じてきたぁ♥全身が性感帯になったみたい♥」
「もうダメ！私またイッちゃう!!私の膣内にご主人様のせーしください♥夕張の子宮をご主人様ので真っ白に改装してください♥」
ギィィィ!!
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ギィィィ

「あっ、あっ♥あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁあんっ♥♥♥」
「はあっ♥はあっ♥お腹暖か～い♥コレ癖になっちゃいそうですぅ♥」
「でもやっぱりコレ、失敗作ですね…
こんなの続けたら頭がパーになっちゃいますよ」
ビクッ
ビュッ
ビュッ
ビュルッ
びゅるっ
「あっ、そうだ！コレと明石の作ってたアレを合わせれば
きっとすごいのができちゃいそう♪」
「早速試さなきゃ♪もちろん、ご主人様が満足してからね♥うふふっ♥」

霞「ほら、これでいいんでしょ！言うとおりに四つん這いになったわ！」
朝潮「クスッ～まるでワンちゃんみたいでとっても可愛いですよ霞♥」
霞「うるさいわね！あんたがそう命令したから仕方なくしてるんでしょ！」
朝潮「そうでしたね♪大好きな司令官を助けるために霞は私に逆らえないんでしたね♪」
霞「な、何言ってんの！バッカじゃない！あんなクズでも司令官は司令官、助けないわけにはいかないでしょ！」
朝潮「相変わらず口が悪いですね霞は…そんな霞のために今日はとっても素晴らしいモノを持ってきました♥」

霞「な、なによソレ……」
朝潮「何って？おチンポですよ～♪ペニパンって言うらしいです～♪」
「ご主人様が霞を躾けるためにわざわざ明石さんに作らせたんだそうです♥
今からこれで霞を徹底的に犯していきますね～♪」

霞「朝潮！あんた何を言ってるかわかってるの！
それに私があんたの言うことを聞く条件に挿入はしないって約束もしてたわよね！」
朝潮「うふふっ～♪それは、ご主人様のおチンポは挿入しないって約束でしたよね？
それに私も愛撫ばかりで飽きてしまいましたしね～♪」
霞「この卑怯者！やっぱりもうあんたは私が知ってる朝潮じゃなくなったのね！」
朝潮「おバカですね霞は。最初からそう言ってたじゃないですか～♪
朝潮はもうご主人様の忠実な奴隷になったんですって♥」

ビイイイン
ガシッ

霞「んぐっ!!!あああああああああんっ!!!」
ビクッ!!
ビビビビ
朝潮「ああっ♥さすが明石さん!感覚が本当に伝わってくる♥これがおチンポの快感♥」
霞「痛いっ!ダメ動かないで朝潮!私初めてだから…」
朝潮「嬉しいですよ霞♥霞の処女を私がもらえて♥大丈夫です、痛みなんてすぐに忘れてしまいますから♪」

霞「あっ！ああ！んっ、痛っ！あっ、ああんっ！やめっ！あっ、はうっ！」
朝潮「あっ、あっ♥いいです！霞のおマンコとっても気持ちいいですよ♥
キツキツで朝潮のおチンポを締め付けてきます♥」
「どうです？だんだん痛みが消えてきて快感が強くなってきてませんか？」

霞「あっ、あんっ！そ、そんなことあるわけが、ああんっ！あっ、んんっ！」
朝潮「強情ですね霞は♥んっ、んんっ♥締め付けが強くなってきました…
もうイッちゃいそうなんですね霞♥」
霞「バ、バッカじゃない！私はあんたでイッたりなんか…あうんっ！あっ、あっ！」

霞「あっ、あっ、はあああああああああああああああんっ!!!!!」
びくんっ♥
びくん♥
ぶしゃるるっ
びゅるっ
びゅっ
ゾク♥
ゾク♥
朝潮「あああああああああんっっっ♥…っ、はあっ、はあっ、しゅごいです♪
これが射精の感覚♥」
「明石さんが言ってましたが射精機能がこんなにすごいなんて♥
霞も気持ちよかったですか?」
霞「はあっ、はあっ、なにこれ…頭の先からつま先まで電流が走ったみたい…
それにこの全身を駆け巡る甘い感覚はなんなの…」
朝潮「うふふっ♪それは朝潮が特別にいただいてきたご主人様の精液です♥」
「一度味わったらもう終わりです♪
もうこの快感を忘れることができなくてもっと欲しくなってしまいます♥
その証拠に…」

朝潮「ほら、霞の心の奥底がご主人様の精液を求めてそれに相応しい姿に変わろうとしてます♥」
霞「えっ！いやっ、なにこれ！体中に何かが這いずり回って私が変えられていく！？」
「やめて！頭の中をイジらないで！私の大切なものを消さないで！！」
朝潮「心配しないでください霞…私達にはご主人様がいてくれます♥
あんなクズ司令官なんて早く忘れてしまいましょう♥」
霞「ダメ…もう何も考えられない…ごめん…司令官…」

朝潮「改装完了ですね～どうですか霞、新しく生まれ変わった感想は？」
霞「……クスッ♪悪くはない…いいえ違う…最高の気分ね♪」
「なんで私は今まであんなクズ司令官のために意地なんか張ってたのかしら？
バッカみたい♪」
「私にとって大切なのはご主人様の役に立ってご褒美をもらう事！
それより大切なものなんてないわ♪」
朝潮「偉いですよ霞♪早速ご主人様に報告しに行きたいんですが
今ご主人様は他の娘を相手にしてるのでもう少し私と遊んでいきましょう♥」

霞「あはあああぁぁぁぁあんっ♥朝潮のおチンポがまた入ってきたあぁ♥」
朝潮「んあんっ♥霞のおマンコ、さっきよりもヌルヌルで気持ちいいです♥」
霞「朝潮のおチンポもさっきより形がはっきり感じられて気持ちいいわ♥
ねえ、早く動いてよ♥」
朝潮「うふふっ♪霞もすっかりメスの顔になってしまいましたね♪
慌てなくてもちゃんと動いてあげますよ♥」

霞「あっ、あっ、ああっ、はあんっ♥スゴイ！気持ちよすぎてバカになっちゃいそうだわ♥」
あっ♥
はあ♥
あっ♥
あっ♥
朝潮「んっ、んっ、んっ♥私も気持ちよすぎて腰が止まりません♥」
霞「はっ、んんっ！あはんっ♥こんなに気持ちいいことを拒否してたなんて私がバカだったみたいね♥あっ、ああんっ♥」
「あっ、あっ♥もうダメぇ！おマンコ気持ちよすぎてイッちゃいそうだわ♥」
朝潮「んっ、んっ、あっ♥私ももうイッてしまいそうです♥霞、一緒にイキましょう♥」
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ズチュ
ズチュ
ズチュ

二人「あっ、あっ、ああああああああぁぁぁぁぁああああああっあああんっ♥♥」
霞「はあっ♥はあっ♥これがセックス…最高だわぁ…♥」
朝潮「はあっ♥はあっ♥
ふふっ♪言っておきますがご主人様とのセックスはこの程度ではありませんよ♪」
霞「それは楽しみね♥早速ご主人様の所に行きましょ♥」
朝潮「クスッ♪その前に司令官に会っていきませんか？
霞の立派な姿を見たら司令官もきっと喜びますよ♪」
霞「嫌よ！あんなみじめなクズ司令官！それより早くご主人様に会いにいきましょ♥」
朝潮「クスクスッ♪可愛そうな司令官♪」
ゾグ♥
ゾグ♥
びくんっ♥
びゅるるっ
びゅるるっ
びゅっ
びくんっ♥

「パパ♥言われたとおり提督を捕まえた、あたし偉い？」
「えへへ～♥パパの抱っこ好き♥」
「え…？大好きだった提督は気にならないのかって？」

「も～パパでも怒るよ…あたしが大好きなパパはパパだけだよ♥」
「あんな人はパパのフリしてた偽物だもん…あたし、あの人嫌い…！」
「ねえパパ？そんな事よりあたし、パパのために頑張った…ご褒美頂戴♥」

ポフッ

「んっ♥チュッ…チュッ…レロ、パパのキス好き…♥チュー…チュッ♥」
「パパ♥ベロ出して…♥んっ、んちゅ…ちゅぱ…♥れぇろ…れろれろ、レロッ…♥」
「ぷはぁ…パパのベロ、あったかくて美味しい…♥
ちゅ…ちゅっ、ちゅぱっ…ちゅ、ちゅ～…んちゅ♥」

ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡

「パパ…あたしパパとのキスで興奮してきちゃった…♥パパのおチンポ頂戴…♥」

「あっ、んんっ！ああんっ♥パパのおチンポきたぁ…♥大きくて暖かくて気持ちいい…♥」
「パパの温もりを体の中から感じられて嬉しい…♥」
「ねえパパ？あたしのおマンコは気持ちいい…？えへへ♪嬉しい…♥」
「待っててねパパ♥あたし頑張って動くから、一緒に気持ちよくなろ♥」
ん♥
ずぽんっ♥

「あんっ…ああんっ♥あっ、あっ…やあんっ♥
パパのおチンポ気持ちいい♥あぁんっ…あっ♥」
「はあ…はあ…お腹の奥、コツコツ突かれるの好きぃ…♥あっ、はあんっ♥」

あっ♡

あん♡

「パパぁ～…キスして…んっ、ちゅっ、ちゅうう…れろれろ～…♥んっ、んぁっ♥」
「ダメ…気持ちよすぎて、あたしイッちゃう！イクッ！イクゥウッ!!」

ずちゅっ
ずちゅっ
ぐぽっ
ぐぽ
ぐぽ

「んやあああああぁぁぁぁぁんんっっ♥♥…はあっ…はあっ」
「ぐすっ…ごめんねパパ…パパがまだイッてないのにあたしだけイッちゃった…」
「気にしなくていい…？ありがと…パパ優しい♥」
「…うん、今度はちゃんとイカせれるように頑張るね…♥」
ぴくぴく
ぴくぴく
ぎゅっ♡
ぎゅっ♡

「パパにもっと興奮してもらえるように、パパの好きな格好になってあげるね♥」
「あたしもこっちの方がパパのモノって気がして…♥」
「この格好も、この格好にしてくれたパパも大好き…♥」
ドクン
ドクン
ドクン

「…どうパパ、興奮する？…えへへ、やった…♥」
「最初はなれなかったけど、今はこの体にぴっちり吸い付いてくる服もパパに抱きしめられてるみたいで好き…♥」
「提督もね、捕まえる時にあたしのおっぱいとかおマンコをジロジロ見てたの…気持ち悪いよね…」
「この格好はパパの為なのに…あたしのおっぱいもおマンコも好きに見て触っていいのはパパだけ…♥」
「パパ…もっともっと、あたしと気持ちよくなろ…♥」
プリュんっ♡
ぎゅ
ぎゅ。

「また、すぐにイッちゃわないようにゆっくり動くね♥」
「んっ…んっ…♥あっ、んんっ…♥これ凄い…
ゆっくり動くとパパのおチンポの形がちゃんとわかる…♥」
「それにあたしのおマンコの中を優しく引っ掻いて
少しくすぐったいけど気持ちいい…♥」
「あっ…あぁんっ♥パパはどう？もっと刺激が強い方がいい？
…わかった、じゃあまた激しくするね…♥」
んっ♥
キュン♥
キュン

「あっ、あっ…ああんっ♥…いい！ゆっくり優しくするのもいいけど激しくするのも好きぃ…♥」
「はあっ…んんっ♥あたしのおマンコとパパのおチンポエッチな音がいっぱいなってる…♥」
「パパ♥パパァ…♥好きぃ…大好き♥あっああんっ♥またキスして…♥」
「ん～ちゅ…ちゅぱっ、ちゅ～…ん…ちゅぱっ！じゅずっ…じゅずず～♥」
「パパイキそう？…いいよ、あたしと一緒にイこ…♥
イクっ、イクっ！いっくううううううううっ♥」

ちゅぱっ
ちゅっ
やろっ
やろっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
すちゅ♡
すちゅ♡

「はあっ…はあっ…、暖かい…♥パパのせーし
あたしの赤ちゃんを作る部屋にいっぱい入ってきてる…♥」
「パパ…このまま赤ちゃん作ろ？…あたし、パパのママになりたい…♥」
「赤ちゃんが大きくなったら、あたしと一緒にパパにご奉仕をするの…♥」
「大丈夫…♥練習台は手に入ったから、きっとパパを満足させられるよ…♥」

『おい貴様！いつまで余をこのような所に閉じ込めておくつもりだ！』
『くっ…このようなdisgrace(屈辱)…Admiralに合わせる顔がない…』
ギリ
『さっさと余を沈めたらどうだ！それともまだ何か余に用でもあるのか！』
『なんだそれは？何を持っている…深海棲艦共が付けていたモノに似ているが…』

『な、なんだ…?何をする!ぃゴニャ!これを外せ!』
『ぉ…なんだこれは…余の記憶が消されていく…?』
『やめてくれ…Admiralとのmemories(思い出)を消さないでくれ…』
ビリッビリ
『……』

「Here…who are you…(ここは…貴様は誰だ…)」
「What?貴様は余のMy lordだと?何を言っている
余にはMy Admiralが…Admiralとは誰だ…?」
「sorry My lord、そうか…そうだったな
余はMy lordのsex slave(メス奴隷)だったな…♥」

ぽ〜〜…

「どうか先ほどの無礼を許してほしい、許してもらえるならなんでもしよう」
「忠誠のキスをすればいいのか?わかった、どこにすればいい?」

「そ、そこにするのか…？…い、いや、My lordがそれを望むなら、余はなんでもしよう！」
「余、Nelsonは My lordに忠誠を捧げる
My lordの敵をなぎ倒し、My lordが望むなら余の体を捧げることをここに誓う」
「チュッ…これでいいのか？…そのままコレを舐めればいいんだな
わかったちゅっ、ちゅぱっ…ちゅ、ちゅ～…」
「んっ、んちゅ…ちゅぱ…れぇろ…れろれろ、れろっ…れろ…れろれろ…れぇ～ろ
れろり…ぺろぺろ…ぺちゃ…ぺちゃ…」

ぴゅるるっ
ぴゅぱっ
ぺろ
ぺろ
べろぉ♥

「My lord気持ちいいか…？
ぺろっ、ぺろっ…じゅる…じゅる…じゅっちゅ、じゅっちゅ！」

「んっ！んんんんんんんんんんんうううううううっ!!!」
「んっ、じゅずっ…じゅずずず～
…っぷはぁっ…amazing ejaculation（凄い射精）だな、My lord♥」
「んぐっ…んぐっ…lovely♥（美味しい）忠誠の見返りに
こんなに美味なセーシを飲ませてくれて感謝する♥」

ぶるるっ

ごくっ…
ごくっ…

ビクビクッ

「なに!?さらに褒美として新しい力までくれるというのか！
ah…My lord♥あなたは天よりも尊きお方だ♥」

「これは…凄いな！余の体の中からどんどん力が湧いてくるのが感じられるぞ！」
「それにwomb（子宮）のあたりが熱い…♥
これが本当にMy Lordのモノになるという感覚なのだな…brilliant♥（素晴らしい）」
ドクン
ドクン
ドクン
「何か大切なモノを忘れている気がするが、そんなものが些細なことに思えてくる…♥」

「……どうだMy lord？新しい力を手に入れた余は？
……そうか、My lordに喜んでもらえて余も嬉しいぞ♥」
「それで……だな、またMy lordのおチンポをもらえないだろうか？」
「さっきから余のinstinct(本能)がMy lordのセーシを欲して止まぬのだ！」
「うむ！先ほどと同じく口で構わぬ！
余はMy lordの尊きセーシをもらえるだけで……♥」
ナニ?

「すう～～、はぁ～～♥oooo smell!（いい臭いだ）
頭が痺れるような、まさに余のMy lordにふさわしいおチンポだ♥」
「では頂くとしよう♥あ～んん、じゅるっ…じゅるるるっ、じゅるぶっ！
じゅぷりゅりゅ…じゅぶりゅ、ぶりゅりゅっ♥」
「んふっ♥亀頭もイジってやろう♥れろ…れろれろ、べろっ…ぺろぺろ…ちゅぱっ！
ちゅ、ぢゅるるるっ♥」
「ちゅ、ちゅぱ…ちゅる…れぇ～～♥ここが好きなのか？ならば、もっとしてやろう♥
れろれろ…れろっ…れろん、れろれろ♥」

ぢゅるる、ぢゅぱ
ぺろ ぺろ
べろぉ♥

「ふふっ♥ピクピク暴れて…射精しそうなのだなMy lord♥
うむ、余の口に射精してくれあむ、れろっ…れろ～♥」

「んっんぶうううううっ♥♥…んぐっ…んぐっ…ごくんっ♥」
「プハーッ♥ぺろっ…なんと甘美な味だ♥余の全てを支配するような味だ♥」
「ふふっ♥飲みきれなかったセーシがまだ残っているな…あ～ん、じゅるるっ…じゅっぽ…じゅっぽん…じゅっぽん♥」

ぐちゅる

ごくっ…ごくっ…

ぢゅるるる

「じゅっぽ…じゅるるっ♥じゅぼぼ♥じゅぼっ♥じゅずっ…じゅずず、じゅぞ♥じゅぞぞぞぞっ♥」

「Wow!まだ出せるのか?amazing!(凄いな)まるでfount(噴水)みたいだぞ♥」
「んっ、はぁ〜♥体中からMy lordの臭いがするぞ♥とても臭くていい臭いだ♥」
「言ってくれればまた飲んだのだがな♥まあ、これはこれでいいものだな♥」
「さて、余の願いを叶えてもらった見返りになんでも余に命令をしてくれ♥」

むぁぁぁ…

ドロ…

「My lordの敵を沈めてくればいいのか?
それとも一晩中余の体を堪能してくれるのか♥」
「ふふっ♥すべてはMy lordの御心のままに♥」

「みんなぁ！比叡のオナニーショーに来てくれてありがとうございます！」
「今日も気合十分なのでいっぱいお金を差し出してくださいねー！」
「ってあれ？そこの最前列の人…司令じゃないですか！」
がばっ
「あっ失礼しました。元帥指令でしたね♪
お姉さま達をご主人様に取られて引き籠ってるかと思ったらこんな所に来てたんですか？」
「まあ、お金さえ払ってくれたら私は構いませんけどね♪」
「それではみなさんお待たせしました♪今日も気合！入れて！行きます！」

「後ろの人もちゃんと見えてますか？このパンツの中に女の子の大事な部分が隠れてるんですよ♥」
「ポールに私のおマンコを擦りつけて…んっ！あぁんっ♥
ひんやりした金属が私のクリトリスに擦れて…気持ちいい♥」

すりすり

「やんっ♥私のおマンコ、お汁が止まらなくなってパンツが透けてきちゃいました♥」
「みんな息荒くしてすっごい見てる♥」
そんな熱い視線向けられたらそれだけで私イッちゃいそう！あんっ♥あっ…イックゥッ♥」

「んっ！んんんんんんんうぅっ♥♥♥…はあっ…はあっ♥」
「すっごい♥私がお潮吹いてるところをみんなが見てる♥ああ…最高です♥」
「あっ、司令に一番お潮がかかっちゃいましたね！でもそれ、拭いちゃダメですよ♥」
「比叡のエッチな臭いに包まれながら私のエッチなオナニーを見たほうがもっと興奮できるでしょ？」
「特に自分の艦娘を取られたのに、その艦娘の痴態をわざわざ見に来る変態司令には♥」
「それでは、一回イッたのでサービスタイム！私が一番お金をくれた人のリクエストに応えます！」

「ひえ～！こんなに沢山！それではそこの二列目のダンディなおじ様に決定です！」
「それではおじ様！リクエストをどうぞ！」

バサッ

バサッ

バサッ

バサッ

「ほう…ほう…ほほう！なるほど！おじ様もなかなかいい趣味をしてますねー♪」
「それでは『本当の比叡ちゃんによる、元司令罵倒オナニーショー』で決定でーす♪」

「みんなが喜ぶから最初はこの格好でいつもしてますが
本当はいつもの姿の方が動きやすいし何倍も興奮できるから好きなんですよねー♥」

「さあ、見てくださいね！ご主人様によってメスの本性剥き出しに改装された比叡の本当の姿♥」
「指令もちゃんと、その粗末なおチンポをおっ勃てて準備しておいてくださいね♥
お客さんの要望ですから♥」

「ふう…どうですか？全身ピッチピチの衣装なのに乳首は丸見えおマンコからはメスのフェロモンがムンムン♥興奮しますか？」
ムチ
「って聞くまでもないですね♥みんなビンビンにおチンポ勃ててる何人かはもうシコリ始めちゃってますね♥」
「指令はどうですか…ってあれ？あまり興奮してませんね…えっ…それで勃起してたんですか？」
「ごめんなさい、みんなと比べてあまりにも小さいので勃起してないのかと思いました♪」
「じゃあ、その情けないおチンポをシコリながら比叡のオナニーをよーく見ててくださいね♥」
ボッコッ

「クスクスッ♪そんな泣きそうな顔をしてどうしたんですか司令？
自分の艦娘を取られて悔しいなら見なければいいじゃないですか♪」
「まあ無理でしょうけどね、司令は元部下の痴態から目を離したくても離せない変態ですもんね♪」
「悔しかったらその粗末なおチンポで私達を取り返せばいいじゃないですか？
そんな度胸があれば…ですけど♪」
「ほらほら～♪このおマンコに挿入してみたくないですか？
ギチギチにおチンポを締め付けてご主人様にも好評なんですよ♪」
「あはは♪やっぱりそんな度胸はありませんか！
まあ私も指令の駄チンポを入れるくらいなら、ポールでオナニーしてる方がマシですけどね♥」
すり
すり
すり

「じゃあ、情けない元司令には比叡からサービス♪激しく、情熱的に腰を振ってあげますから自分のおチンポを挿入してると思ってシコッててくださいね♥」
「あっ…あっ…はぅんっ♥はあっ…はっ…あっ…あはぁんっ♥気持ちいい♥おマンコからイヤらしい音がいっぱいなっちゃってる♥」
「このおマンコにおチンポ入れたらどんなに気持ちいいんでしょうね？想像してみてください♪」
「あはは♪必死な顔でおチンポシコってる♪その情けない姿がお似合いですね、司令♥」
「あっ、あはんっ♥私ももうイッちゃいそうです♥
提督のおチンポじゃなくて、ただの鉄の棒に私イカされちゃいます♥」
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ

「あっ、あっ、イクッ、イクッ、イックウウウウウウウウッッ♥♥♥」
「はあっ♥はあっ♥ほら見てください、私お潮のふき過ぎでおマンコの部分の服が透けちゃいました♥」
ビクッ ビクッ
ビクッ ビクッ
「私のおマンコがおチンポ欲しくてヒクヒクしてますね～♪
クスクスッそれではお待ちかねの本番タイムです♥」
「さあみなさん！次の一番お金を出してくれた方はなんと
私比叡のおマンコにおチンポを挿入する権利が買えます♥」
ドンッ
アアアアあ♡

「はい、そこの三列目の太ったおじ様！見事落札です！ではステージに上がってください♪」
「なんですか司令？まさか私を落札する気だったんですか？」

バサッ

バサッ

「クスクスっ♪残念ですね、私のおマンコを味わえるのはご主人様かご主人様のために
お金を払ってくれるかたのみなんです♪」
「お金のない人はさっさと帰ってください♥
ただショーが終わった後の片づけをしてくれるなら最後まで見ていってもいいですよ♥」
「しばらくしたら金剛お姉さまも来ますし…どうしますか？し・れ・い♥」

バサッ

バサッ

「あっ、やっと起きたん提督？まったくお寝坊さんやねぇ♪」
「なんじゃ？体が動かん？そりゃそーじゃな♪
うちが提督のお茶に薬を仕込んどいたんじゃからなぁ♪」
「なんでそがいな事をするのかって？そりゃ、ご主人様の為に決まっとるじゃろ♪」
「今のうちな、もう提督の艦娘だった浦風じゃないんよ、今はご主人様のメス奴隷艦娘じゃ♥」
がばっ

「ご主人様、もう入って来てええよ♥提督、この人がうちのご主人様じゃ♥男前じゃろ♪」
「実は提督を動けなくしたのはうちのご主人様のお願いを聞いてもらいたいからなんじゃよ♪」
「この鎮守府の指揮権と全艦娘をご主人様に明け渡して欲しいんじゃ♪」
「うふふっ♪そらぁ素直には聞いてくれんよねぇ♪」
そいじゃうちがご主人様にご褒美をもらってる間に気が変わったらいつでも言ってええからね♪」
ガチャッ
「ご主人様のご褒美おチンポ頂戴♥」

『あっはぁぁぁんっ♥♥ご主人様のおチンポ、ぶち大きいい♥
入れただけなのに、うち軽くイッてもうた♥』
『このおチンポ入れた時の電流が走る感覚♥これメッチャ好きなんよ♥』
ずぽぽ♡
『あんっ♥おマンコのお肉も勝手におチンポに絡みついて…♥動いてないのにばり気持ちいい♥』
『えぇんよご主人様♥うちに気を使わんと好きなように動いて、うちにご主人様の精液頂戴♥』

「あんっ♥あんっ♥あっ…あっ♥やんっ、激しい♥ご主人様、ばりかっこえぇよ♥あっ…あぁんっ♥」
「ゴリゴリっておマンコを激しく犯して♥うちもぶち気持ちえぇよ♥」
「うふっ♪て・い・と・く♪うちのおっぱいばっかり見てどうしたん？ココもズボン越しにわかるくらい勃起して♪」
あんっ♡
あっ♡
ばるんっ♡
ばるん
たぷ
たぷ
たぷ
たぷ♡
「ご主人様に突かれるたびに暴れるうちのおっぱいに興奮したん？ふふっ、提督はスケベじゃねぇ♪」
「えぇんよ、うちもうイキそうじゃし、ご主人様に犯されて絶頂するうちをいっぱい見て♥」

「あっ♥イクッ！イクイクっ！イッグウウウウウウウウウッ♥♥♥」
「はあっ…はあっ…♥ご主人様のピストン、ぶち凄かぁ…♥
うち…ご主人様の射精まで耐えれんかったよ…♥」
「提督もどうじゃった？うちのだらしないアクメ♥
もし提督がご主人様の条件をのんでくれるならいつでも見せてあげてもええよ♪」
「う～ん、それでもつまらんかぁ…それなら、こうゆうのはどうじゃ♪」
「提督がご主人様の条件をのんでくれるなら、うちのおマンコ使ってもええよ♥」

「うふふっ♪そんな強がり言ってもココはうちらのセックスを見てピクピク反応してるけぇ♪」
「まっ、うちのおマンコがいらんなら別にええけど♪…どうするん♪」
「次ご主人様がイッたらもうちらはこの部屋は出ていくから、もうおマンコは使えんし」

「うちも本気でご主人様をイカせにいくからがこれが最後のチャンスじゃよ♪」
「それまでによーく考えるんじゃね、て・い・と・く♥」

ドクン
ドクン
ドクン
ドクン

「どうじゃ、提督♪これがご主人様に変えられた新しいうちの姿じゃ♥」
「この大きいおっぱいも、発情しきったメスマンコも
提督がみんなをご主人様に差し出すだけで使いたい放題なんじゃよ♥」
「うちのおマンコが壊れて提督のおチンポが折れてしまうまで使いたい放題じゃ♥」

「ほらほら、早く答えんとまたご主人様にうちの体好き勝手にされてまうよ♥
他の男に取られて悔しくないん♪」

『んっはあああぁぁぁんっ♥♥提督がグズグズしてるから
またご主人様のおチンポがうちのおマンコに入ってきたぁ♥』
『今うちのおマンコのお肉を絞めて、ご主人様のおチンポをギュッとしとるんじゃよ♥』
あんっ♡
すまぬ♡
『男にご奉仕することしか考えてないメスマンコ、提督も味わいたいじゃろ♪』
『提督もうちのおマンコでぶち気持ちよくなりたいじゃろ♪』

「あぁんっ！あっ、あっ♥ほらご主人様がピストンを始めてもうた♥あっ、あはんっ♥」
「あんっ♥おマンコ気持ちいい♥赤ちゃんの部屋の入り口コツコツ突かれるのぶち好きぃ…♥」
「提督も望めば今ご主人様が使ってるトロトロおマンコも
提督の目の前で暴れまわってるおっぱいもいっぱい使えるんじゃよ♥」

「あっ…はっ、やんっ♥ご主人様のおチンポピクピクしてきたぁ♥」
「もうイキそうなんじゃねご主人様♥うちももう…イクっ…イクイクッ♥」

「あっはあああぁぁぁあぁぁあぁああんっ♥♥♥」
「はあ…はあ…ご主人様のせーし…暖かぁ…♥」
「それでどうじゃ提督、答えは変わらん？……うふふっ♪
これで今からこの鎮守府と提督の艦娘はご主人様のモノじゃね♥」
『えっ、約束のセックス⁇何に言いよるの♪うちが言ったのは
『おマンコやおっぱいを好きなだけ、オナニーのおかずに使ってええよ♥』って話じゃ♪』
「まさかうちが提督とセックスするって思ったん？何を勘違いしちゃったんじゃろうなぁ♪
バカな、て・い・と・く♪」
はーっ♥
はーっ♥

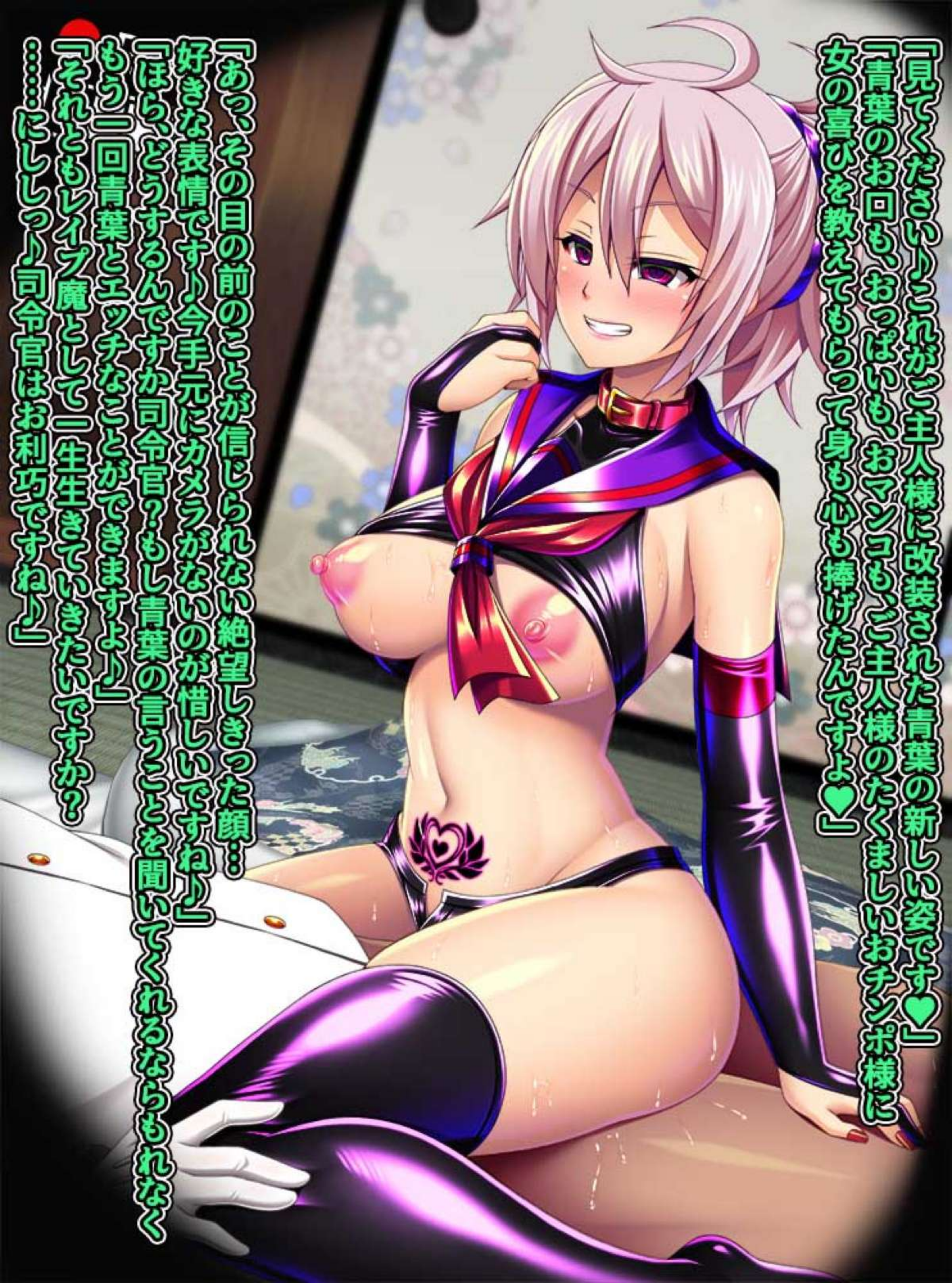
「おっ、司令官！おはようございます♥」
「えっ、この状況ですか？そんなの見ればわかるじゃないですか♪」
「青葉は司令官とエッチなことをしたくて寝起きを襲いに来ちゃいました♪」
クイッ
がばっ
REC
「ふざけてなんかないですよ～実は青葉、司令官の事を前から好きだったんです♥」
「だからいいですよね司令官♥女の子に恥をかかさないでくださいね♥」

●REC
「ししっ♪口ではそう言ってもおチンポは正直ですね♥
ほら青葉のパンツをずらしておマンコにズブッと…♥」
「んっ、あんっ♥司令官のおチンポが青葉のおマンコに食べられちゃいましたね♪」
ズブッ
「どうですか？司令官とエッチしたくてエッチなよだれをたらした
青葉のおマンコのお味は♥」
「気持ちいい？それは恐縮です♥
いいんですよ、青葉を司令官のオナホだと思って好きなように腰を振っても♥」

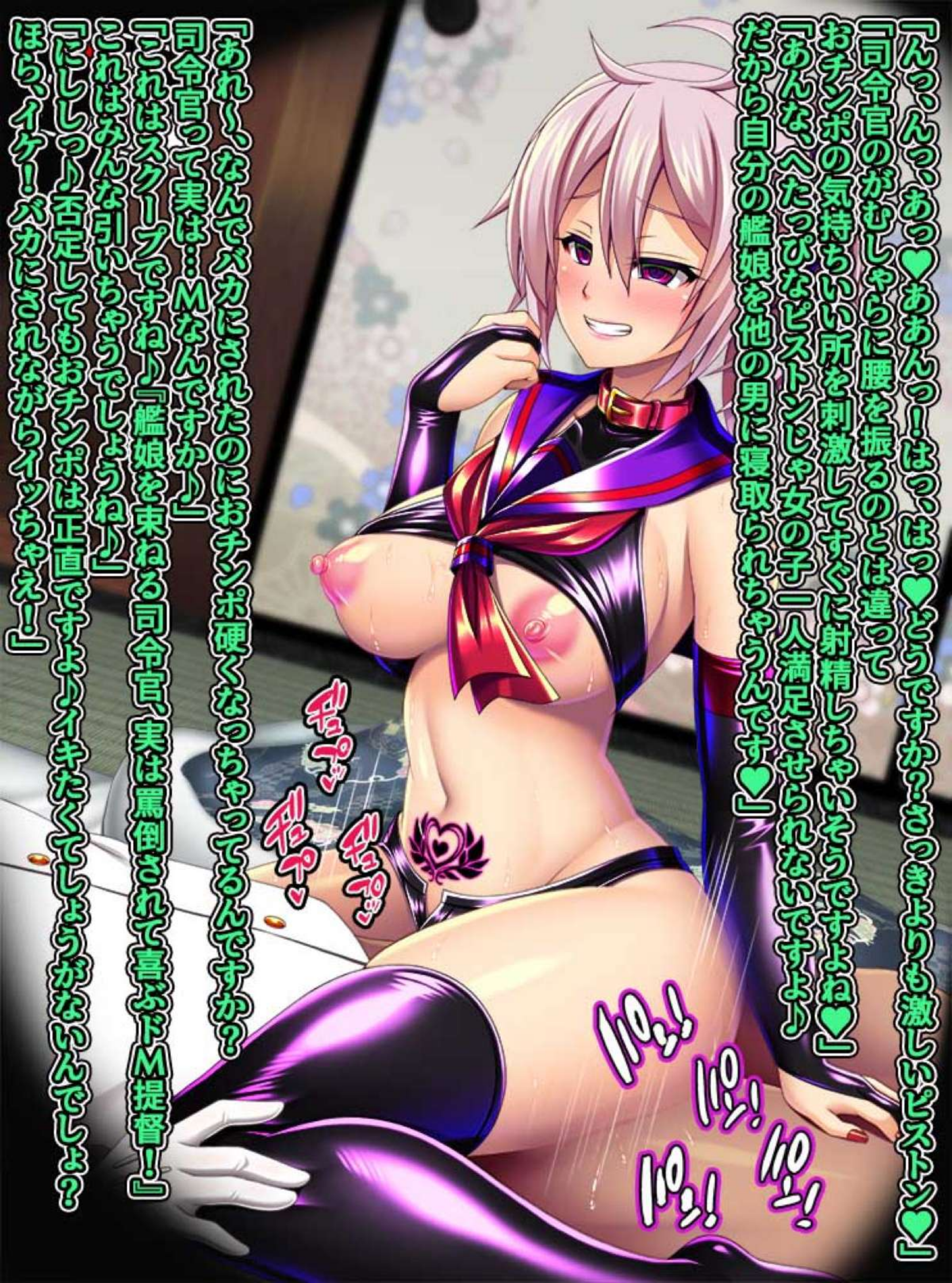
「あっ、あんっ♥あっあっ…あぁんっ♥いいです司令官♥もっと青葉を壊す気で腰を振って下さい♪あっ、やぁんっ♥」
「ぐちゅぐちゅエッチな音がしてヤラしいですね♥青葉は今司令官専用の肉オナホになっちゃってますね♥」
「そんな必死な顔して、童貞丸出しって感じですよ♪とってもいい表情してます♥」
「えっもう出ちゃいそうなんですか？じゃあ『青葉、俺の子を孕め！』って言いながら射精してください♪」
「そう言ってくれるなら、特別に青葉のおマンコにナ・カ・ダ・シ♪してもいいですよ♥」
「にしし♪…司令官に無理やり孕まされちゃうーーー♪」

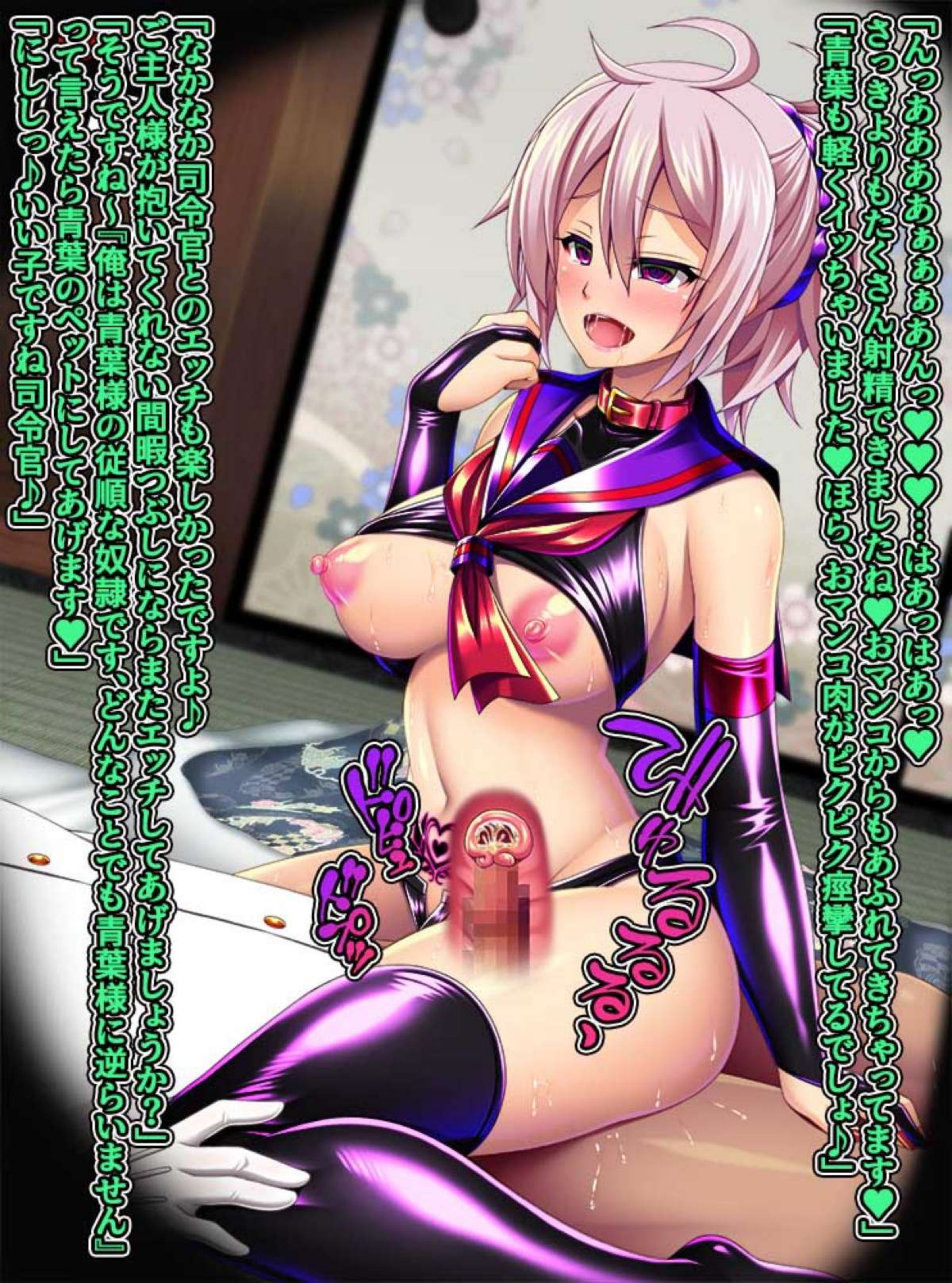
REC
「はあっ♥はあっ♥どうでした司令官？青葉に中出し、気持ちよかったですか？」
「それは何より♥青葉もまあまあ気持ちよかったですよ♥」
…はっ、しまった！うっかり本音が…」
ちらっ
「あー…まあ撮りたい映像は撮れたからまあいいか♪」
「にしし♪何を言ってるって顔ですね司令官♪」
さーて問題です！あそこの壁に埋まってるのは何でしょうか♪」
「せいかーい！答えはカメラでした♪」
つまりこの行為はバッチリカメラに収められちゃったって事です♪」
ビュッ
ビュッ

「後は今の映像をちょこっと編集すれば司令官に無理やりエッチをするよう命令された可愛そうな青葉ちゃんの映像の完成ですよ♪」
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ
「なんでこんな事をするかって？そ～れ～は～♥
司令官には青葉のご主人様のために軍の情報を流して欲しいからです♥」
「司令官は上層部に顔が利きますからね♪」
ご主人様の欲しい情報を随時青葉に教えて欲しいんですよ♪」
「もし嫌なら、さっきの映像を上層部とネットにバラまいて
一生パワハラレイプ魔として後ろ指をさされる人生を送ってもらいます♥」
「冗談？冗談なんか言うはずないじゃないですか♪その証拠に……」


「見てください♪これがご主人様に改装された青葉の新しい姿です♥」
「青葉のお口も、おっぱいも、おマンコも、ご主人様のたくましいおチンポ様に女の喜びを教えてもらって身も心も捧げたんですよ♥」
「あっ、その目の前のことが信じられない絶望しきった顔…
好きな表情です♪今手元にカメラがないのが惜しいですね♪」
「ほら、どうするんですか司令官？もし青葉の言うことを聞いてくれるならもれなく
もう一回青葉とエッチなことができますよ♪」
「それともレイプ魔として一生生きていきたいですか？
……にしし♪司令官はお利巧ですね♪」

「それじゃあご褒美に、さっきのお遊びセックスより気持ちいい青葉の本気セックスを味わせてあげます♪」
「んっ、んん～♥どうですか？さっきより深いところまではいったでしょ♪それにおマンコのお肉もニュルニュル動いて…」
ズリ
「あんっ♥まるでおチンポをおねだりするみたいなエッチな動き♪これもご主人様に調教された成果ですよ♥」
「司令官も気持ちいいみたいですね♪さっきよりもお顔がだらしなくなってますよ♥」
「でもまだまだ、こんなのは本気セックスの準備段階ですからね♪」


「んっ、んっ、あっ♥ああんっ！はっ、はっ♥どうですか？さっきよりも激しいピストン♥」
「司令官のがむしゃらに腰を振るのとは違ってですね♥」
おチンポの気持ちい所を刺激してすぐに射精しちゃいそうですよ♥
「あんな、へたっぴなピストンじゃ女の子一人満足させられないですよ♪
だから自分の艦娘を他の男に寝取られちゃうんです♥」
「あれ～、なんでバカにされたのにおチンポ硬くなっちゃってるんですか？
司令官って実は…Mなんですか♪」
「これはスクープですね♪『艦娘を束ねる司令官、実は罵倒されて喜ぶドM提督！』
これはみんな引いちゃうでしょうね♪」
「にしし♪否定してもおチンポは正直ですよ♪イキたくてしょうがないんでしょ？
ほら、イケ！バカにされながらイッちゃえ！」
ヌッポ♥
ヌッポ♥
ヌッポ♥
パンッ！
パンッ！
パンッ！
パンッ！


「んっあああぁぁぁあんっ♥♥♥…はあっはあっ♥
さっきよりもたくさん射精できましたね♥おマンコからもあふれてきちゃってます♥」
「青葉も軽くイッちゃいました♥ほら、おマンコ肉がピクピク痙攣してるでしょ♪」
「なかなか司令官とのエッチも楽しかったですよ♪
ご主人様が抱いてくれない間暇つぶしにならまたエッチしてあげましょうか？」
「そうですね～『俺は青葉様の従順な奴隷です、どんなことでも青葉様に逆らいません』
って言えたら青葉のペットにしてあげます♥」
「にしし♪いい子ですね司令官♪」
ぐりぐる
ドピュ
ドピッ

REC
「これで司令官は一生青葉に逆らえない従順なオスペットになったわけですね♪」
「大丈夫♪青葉はペットは大切にする方なので♥…ただし…」
「もし青葉に逆らったら…わかってますよね♥」
「さあ、これから先青葉とご主人様のために大いに役にたってもらいますよ!…元…司令官♥」

「はあ…やだなぁ…今日もパパの言いつけで提督を見張らなきゃいけないなんて…」
「ねえ、さっきからどこ見てるの？ハアハア息が荒くて…気持ち悪い…」
「そっか…提督、自分の部下の艦娘をパパに取られていつも興奮してる変態だもんね…」
「提督の艦娘だったあたしに見下ろされて興奮しちゃったんだ…」

「いつまでもハアハアされても気持ち悪いし…
パパがお仕事終わって迎えに来てくれるまで遊んであげる…」
「ただし使うのはあたしの足だけだよ…直に提督に触れるのは嫌だもん…」
「ほら、おチンポ出して…早くしないと気が変わって提督のタマタマを潰す遊びに変えちゃうよ♪」

「…？これ、完全に勃起してるの？パパのと比べて全然小さい…」
「そっか…パパのおチンポが普通の人とくべて大きいんだ♪…パパやっぱりすごい♥」
「それに比べてこのチンポ…あたしの足でスリスリされてるだけなのに
もうイキそうなくらいビクビクしてる…」
「イキそうならイッてもいいよ…好き気にしたら…」
すりっ
すりっ

「んっ、んんうっ！…本当に出た…お口でもおマンコでもない、足の裏でイクなんて…気持ち悪い」
「うわ…あたしの足ドロドロ…それに臭いも生臭い…」
「…？なに満足そうな顔してるの？まだまだ終わりじゃないよ…」

「あたしは提督の精液を出し尽くして、気持ち悪い息づかいを止めたいだけなの…
提督に気持ちよくなってもらうのが目的じゃないの」

「だから射精のよいんなんて与えてあげない…イッてもイッても射精させ続けてタマタマ空っぽにしてあげる」
「ほら…ほら…どう？休みなく射精させると苦しいでしょパパに教えてもらった男の人の拷問のしかただよ♪」
「おチンポ壊れちゃいそう？そのまま壊れちゃえばあたしも楽だし、別にいいよ♪」
「ほら…もっと激しくしてあげるから、そのままおチンポ壊しちゃお？」
すりっ
すりっ

「んっ…んっ…はあ、はあ、すごい！さっきよりも大きくビクビクしてる♪
これ…楽しいかも♪」
「おチンポだけじゃなくて全身ビクビクしてきた…
ダメだよ提督…あんまり動くとタマタマ踏みつぶしちゃうよ？」
「そうそう…そうやって大人しくしてて、提督がビクビク悶えてると足動かしづらいし
なにより…気持ち悪い…」
「はあ…なんで気持ち悪いって言うたびにビクッて反応するの？救いようのない変態…」
すりっ
すりっ

「うわあ…あたしに悪口言われながら射精してる…しかもさっきよりも量が多い…」
「こんなドMな変態提督の事をパパだと思ってたなんて…本当に気持ち悪い…」
「どうしたの…足を止めて欲しい？そんなこと言って…ドM提督はこうされたいんでしょ？」

びゅるるるるるっ♡

ビュッ

どぴゅっ

「射精しても射精しても、休みなく足コキされて…おチンポさんおバカになっちゃうのがいいんだよね♪」

「ほらほら…動いちゃダメだよ？抵抗なんてしちゃダメ
射精したくなったら好きなだけ射精していいから」
「もう射精することしか考えられないよね？いいんだよ我慢なんてしなくても」
「おチンポ壊れちゃったんだから仕方ないよね…でもドM提督はそれでも嬉しいよね♪」
「ほら、イケ！…イッちゃえ！女の子に踏みつけられながら情けなくイッちゃえ！」
ジュ
ジュ
ジュ
ジュ

「んっはぁぁんっ♥♥今までで一番射精した♪
パパが言ってたドMの人は言葉で攻めながらすると喜ぶって本当だったんだ♪」
「よだれたらしながら、情けない顔をして…そんなにあたしの足コキ気持ちよかった？」
「そう…でもまだまだ終わらないよ
言ったでしょ『提督のタマタマを空っぽにするまでやめない』って」
「んっ？今のノック…だれだろ？」
びゅるるるるっ♥
どぴゅっ
ビュッ

にぱぁ
「あっ！パパ♥お仕事終わったの！……これからあたしとセックスしたい？うん！もちろんいいよ♥」
「あっでも、あたし遊んでたから汚れをお風呂で洗い流したいんだけどいいかな？
……うん、パパも一緒に入ろ♥」
「パパ♥今日はどんな事して欲しい？おっぱいでパイズリ？それともお尻でアナルセックス？」
「えっ！あたしの足で足コキされたい？
うん……パパがして欲しいなら、愛情込めていっぱい足コキするね♥」
「あっ、提督……ちゃんとこの部屋片づけしておいてね……明日海風姉と江風がこの部屋使うんだから」

「きゃっ♥どうしたんですかご主人様♪
照月、これからワンちゃんのお散歩に行こうかと思ってたんですけど」
「やんっ♥そんなに照月のお尻におチンポを押し付けないでくださいよ♪
照月も我慢できなくなっちゃうじゃないですか♥」
「えっワンちゃんはいいのかって？それよりご主人様のおチンポの方が大切です♥
ワンちゃんは後で散歩に連れて行けば大丈夫ですよ♥」
「そんな事よりご主人様♥
早く照月のおマンコに逞しいおチンポをください♥」

「んっはあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんっっ♥キタキタァー！照月のおマンコ肉をかき分けておチンポ様が入ってきたぁ♥」
「やっぱりご主人様のおチンポが一番気持ちいい♥ワンちゃんのでも試してみたけど、全然気持ちよくないんだもん♪」
「この女の子の意思を無視して無理やりお肉をかき分けて入ってきて男に屈服させるのが本物のおチンポだよねご主人様♥」
ずぶんっ♡
「まだ動いてないのに照月の子宮、もうイッちゃいそうです♥このままだと変になっちゃいそうですよご主人様ぁ♥」

「あっ…あっ…ああんっ♥気持ちいい♥ごりゅごりゅって照月の膣内を出たり入ったりして全身ゾクゾクしちゃいます♥」
「はっ、はあんっ♥んっ、んっ、んあっ♥ぱんっぱんってヤラしい音がなって隣の部屋のワンちゃんにも聞こえちゃいますよ♥」
「あんっ、あんっ♥あぅんっ!…あっ、あっ♥もう照月我慢できません!イッちゃいそうです♥」
「ご主人様も照月の膣内にいっぱい♥照月を孕ませるくらいいっぱい射精してください♥」

「あ、はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんっ♥♥♥…はあっ…はあっ♥」
「お腹熱いですご主人様♥本当に赤ちゃんできちゃったかも、いひひ♪」
「どうでしたか？照月のおマンコ気持ちよかったですか？…それは良かったです♥」
ドプッ
ドプッ
ドプッ
「あっ…ご主人様のおチンポ、また照月のおマンコの中で大きくなってきましたよ♥」
「ご主人様のおチンポが満足するまで、照月のおマンコをガンガン使ってください♥」

「ん、んっ…はぁ…ン♥んん…んっ、んっ…ん…ンッ、ンンッ…んっ♥
射精したばかりなのにスゴイ♥ンッ…アハッ、ンッ♥」
「はぁっ…はぁっ…あっ、あっ♥さっきのせーしで滑りもよくて
音もとってもイヤらしいですね♥」
「あああ♥いやぁ～～～～ん…んぐひぃぃぃっ♥
そこはダメです♥そこを攻められると…♥」
「あっ…あっ…も、もうダメ…ダメェ！照月、またイッちゃいますぅぅぅっ！」

「はあっ…はあっ…どうして止めちゃうんですかご主人様ぁ？」
「あっ、ごめんなさい！奴隷が主人を差し置いてイクのはダメですよね…
イク時はご主人様も一緒じゃなきゃ」
ピタッ…
「ご主人様、このダメなメス奴隷の照月にお仕置きをしてください！
誰が主人か照月の体に教え込んでください♥」

「んっ、んっ♥はあっ…はあんっ♥ん、んっふ、ん…ンッ…ンンッ…アハッ、ンッ♥
気持ちいいですご主人様ぁ♥」
「照月たちに、提督の所の艦娘をしてただけじゃわからなかった
女の快楽を教えてくれてありがとうございます♥あっ…あはっ♥」
「照月のおっぱいもおマンコもお尻の穴も
足の先から頭のてっぺんまで、照月の全部はご主人様のモノです♥ああんっ♥」
「ご主人様が望むなら体を使ってご奉仕して
ご主人様に最高のお射精をしてもらえるのが照月の喜びです!んんっ♥」
ズプッ!
ズプッ!

「えっ、どうしましたっ、しゅ……んっ、あぁぁぁぁぁんっ！
はっ激しすぎですっご主人様ぁ！」
「えっ、その言葉が嘘じゃないか確かめてやる？
あっ！あぁんっ♥♥ダメェ！そんなにされたら
またすぐにイッちゃう!!」
「ん、んっ……はぁ……ン！……えっ？
ご主人様がイクまで我慢する
……わかりました……照月頑張ります！」
「あ、あんっ♥……ンッ、ン……んは……あぁんっ♥
ご主人様、おチンポピクピクしてきて……
もうイキそうなんですか？あうんっ♥」
じゅぽ♥
じゅぽ♥
じゅぽ♥
「我慢しないで射精してください！
照月もこれ以上我慢できません！、ダメェ！イク、イクイクゥーーーー！」

「んんっ、んんんんんんんんんんぅぅぅっっっ♥♥」
「っ…はぁっ…はぁっ…お尻と背中が暖かい…♥
それに臭いもここまで匂ってくる…♥」
「ご主人様、言われた通りにご主人様がイクまで我慢できました…♥
照月偉いですか…？」
ビュ
ビュ
ブッビュル
「いひひっ♪ご主人様に褒められちゃった♥照月、とっても嬉しい♥」

「えっ！ちゃんと言いつけを守ったご褒美に今夜はずっと照月の相手をしてくれるんですか！」
「うそ！やったぁ♥じゃあ、早速続きをしましょうよご主人様♥あっ、でも一回お風呂で体を流しながらイチャイチャするのもいいですね♥」
「えっ…あっ！忘れてました！…でもせっかくご主人様が構ってくれるから今夜のワンちゃんのお散歩はお休みにします♥」
「というわけで、さっきからドアの隙間から覗いてるワンちゃん♪今日の散歩は中止だから頑張って一人でシコっててね♪」
「さあ、行きましょうご主人様♥照月のおっぱいを使ってお背中流してあげますから♪…いひひっ♥」
ドロォ。

暁「や、やっぱり大きいわね…で、でも一人前のレディの暁達には余裕かしらね！」
響「そうだね♪じゃあご主人様、これより響暁のご奉仕を開始するよ♥
要望があったら遠慮なく言ってね♥」
暁「あ、響ズルい！暁がそのセリフを言いたかったのに！むぅ～」
ボロン…
響「ふふっ♪じゃあお詫びに今日は暁に
おチンポの一番美味しい所を譲ってあげるよ♪」
暁「本当!?後で頂戴って言っても上げないんだからね！」

暁「それじゃあ、頂きま～す♪あむっ、れろれろ♥あむあむ、ちゅっ♥れ～れ～ろ♥あむあむ…ごくんっ♥」
暁「ん～美味しい♥やっぱりご主人様のチンカスはどんな豪華なランチよりも美味しいわね♥響ももう舐めてもいいわよ♪」
響「ありがとう暁♪でもまだまだ甘いね この皮をめくったところに二番濃厚で美味しいのがあるんだよ…ぱくっ♥」
暁「あー響ズルい！ご主人様のチンカスは暁にくれるって言ったのに！もーそっちがその気なら…！」
れろ
れろ
れろ
ちゅっ♥
ちゅっ♥
ちゅっ♥

暁「はぁむ…っ…れろれろ、んっ、んっ！んっふ、んっちゅ、んちゅっ…ちゅっぱちゅっぱぁ♥」
響「スゴイな暁♪この間よりも深く咥えられてるよ♪それに顔もとってもヤラしい♥」
暁「べろべろべろっ、ひひき～よふぇいなこと言わないれよ～…んちゅ、んじゅるるるっ！」
暁「んちゅ、ちゅぱっ！ちゅるるる、ちゅる、ちゅうう～～～ちゅづっ！ちゅるるる…っぷはぁ！」
暁「もう響と変わるの？ご主人様がそういうならしょうがないけど…」
響「それじゃあ、次は私、響がご奉仕させてもらうよ♥」
かぷんっ♥
れろれろ
ちゅぽ ちゅっ
ちゅるっ

響「じゅるる…じゅるるるっちゅっ！ちゅぱっ！ちゅぱぱっ、じゅるっ、じゅるるるっ！」
響「じゅるっ！じゅるっ！じゅるっ！じゅるっ！じゅぱっ！れぇ～ろれろ、れれろ、れぇ～えろ…れれぇ～♥」
暁「うわ…響のフェラ、とっても激しい…ご主人様も暁の時より気持ちよさそう…なんか悔しい！ぷんすかっ！」
響「ちゅぱちゅぱ、ちゅっぱ！おチンポがピクピクしてきた♥もうイキそうなのかいご主人様♥」
響「どこでも好きに射精していいよ♥じゅる…じゅずずず、じゅっちょ♥でもできれば私の口に出してくれると嬉しいな♥ちゅっぱ♥」
ぢゅぽ♥
ぢゅぽ♥
ぢゅぽ♥
ぢゅぽ♥
ぢゅるる
ぢゅるるるっ

響「んっ、んっんんんんんんんんんんんんんぅぅっ♥♥♥」
響「…っぷはぁ♥…ズッ…ズルルルッ♥ご主人様のチンカスもいいけど
やっぱり私はこのセーシが好きだな♥」
響「ほら、いつまでもむくれてないで
ご主人様が次は暁のお口に出したいって言ってるよ♪」
暁「えっ、そうなの！……し、仕方ないわね！
この一人前のレディの口技で響よりも気持ちよくしてあげるわ♪」
ドプッ ドプッ
ビュルルッ

暁「ちゅるるる、ぢゅる、ちゅうぅぅ～～～～♥ちゅづっ！ぢゅるるる、ぢゅっぱ…っ」
暁「ちゅっぱ、ちゅっぱ…んんっ、じゅるるるじゅちゅうぅぅぅぅっ…ケホッ、ケホッ！」
響「大丈夫かい暁？そんなに無理に口の奥に突っ込むから…」
暁「大丈夫よ、ちょっと喉奥に当たってビックリしただけだから…レチュッ…ジュルルル、ジュバッ♥」
かぷんっ
れろれろ
ちゅぽ ちゅっ
ちゅるっ

暁「じゅずっ！じゅずっ！んっんんんんんんんんんうぅぅ♥♥♥」
暁「んっ、ごくっ…ごくっ…っぷは、いきなり出したらビックリしちゃうじゃない！」
暁「えっ、暁の方が響より」「生懸命で気持ちよかった？
と、当然じゃない！暁のほうが響よりお姉ちゃんなんだから♪」
響「ふふっ♪よかったね暁♥それじゃあ最後の仕上げをしようか♪」
暁「わかってるわよ響！最後は暁と響のお・そ・う・じ・フェ・ラ♥」
ドクッ
ドピュッ
どくッ
どくッ

二人「それじゃあ、いただきま～す♥」
暁「あむっ♥ちゅっぱ、ちゅっぱ、んっ、ジュズズズッ…じゅるるる、ちゅっぱちゅっぱ♥」
響「べろべろ、れろっ…れろろ、ちゅばばっ…じゅずっ、ジュルルルズッ♥じゅずっ♥じゅずっ♥」
暁「さっき出したセーシがまだ残ってて美味しい♥れぇ～えろ…れれぇ～♥」
響「またおチンポピクピクしてきた♥またイキそうなんだねっ主人様♥じゅずっ、ジュルルルズッ♥」
暁「出して出して♥ご主人様の好きな所でいいからいっぱい出して♥」
れる
れる
れる
ちゅ
ちゅ
ちゅ
ちゅ

二人「んっぁぁぁぁぁぁんっ♥♥♥」
暁「すんすん…はぁ～いい臭い♥この臭いを嗅いでると暁のおマンコも熱くなってきちゃうわ♥」
響「これじゃ、お掃除フェラの意味がないね♥これはお風呂で体を洗いながらまた、お掃除をした方がいいかな♥」
暁「それいいわね♪お風呂だったら暁達の全身を使ってお掃除ができるものね♥」
響「そうと決まったら、早くお風呂場に行こう！ご主人様♥」
二人「お掃除が終わったら、今度はベッドでご褒美が欲しいな～ご主人様♥」

響「ご主人様、この後の予定はあるのかい？」
暁「それなら今日こそは、暁達のご奉仕でご主人様をメロメロにしてやるんだから～」
響「暁、ご主人様に喜んでほしくて夜中に必死に練習してたもんね♪
いつも練習に付き合わされて私までフェラが上達したと思うよ♥」
暁「もー響！そういうことはご主人様の前では言わないって約束でしょ！
裏でこっそり練習してたとかレディとして恥ずかしいじゃない…」
響「ふふっ、ごめんごめん♪
それじゃあ、練習の成果をしっかりご主人様にみせないとね～」

逐駆一十六策

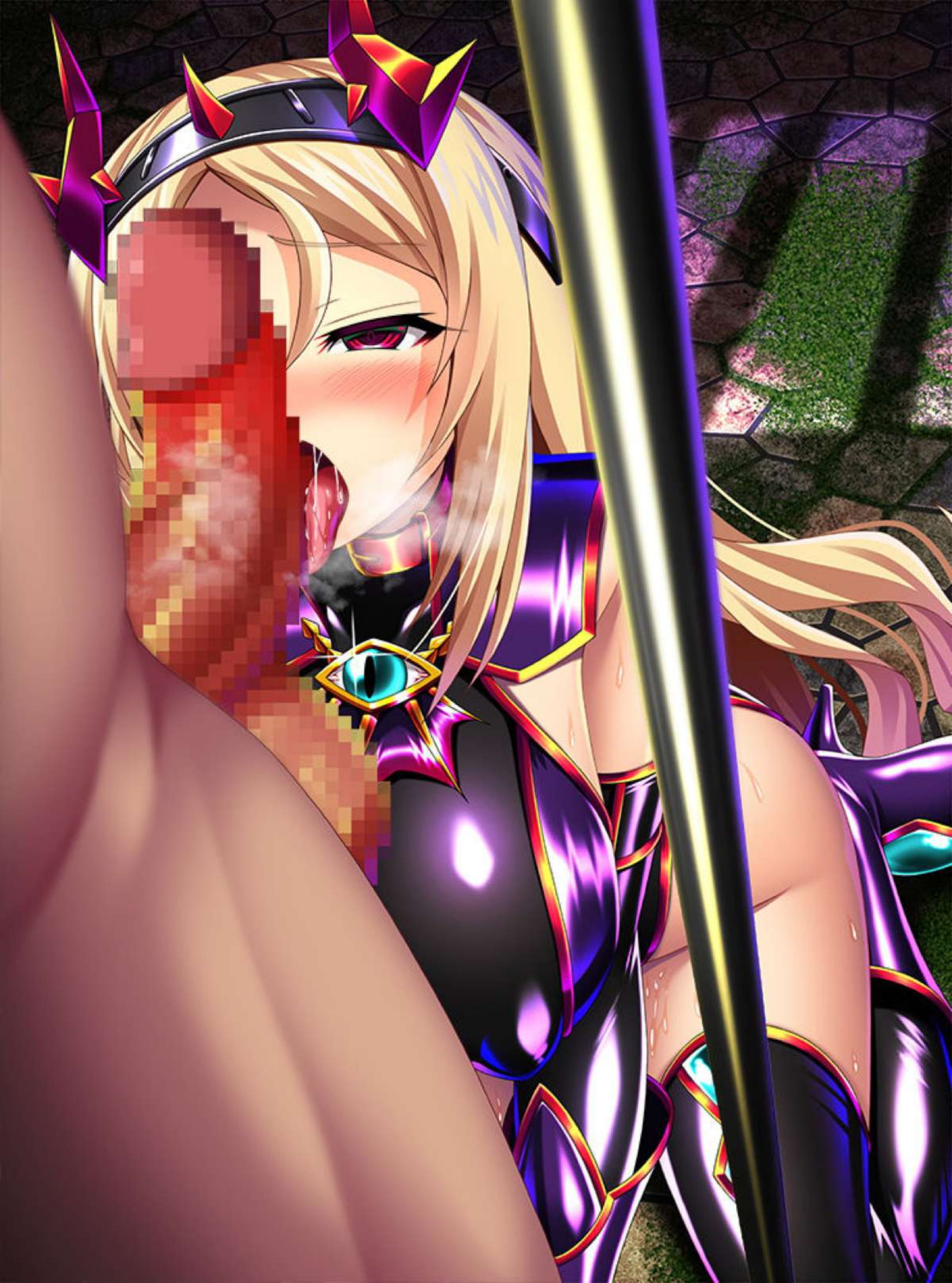
逐駆一十六策

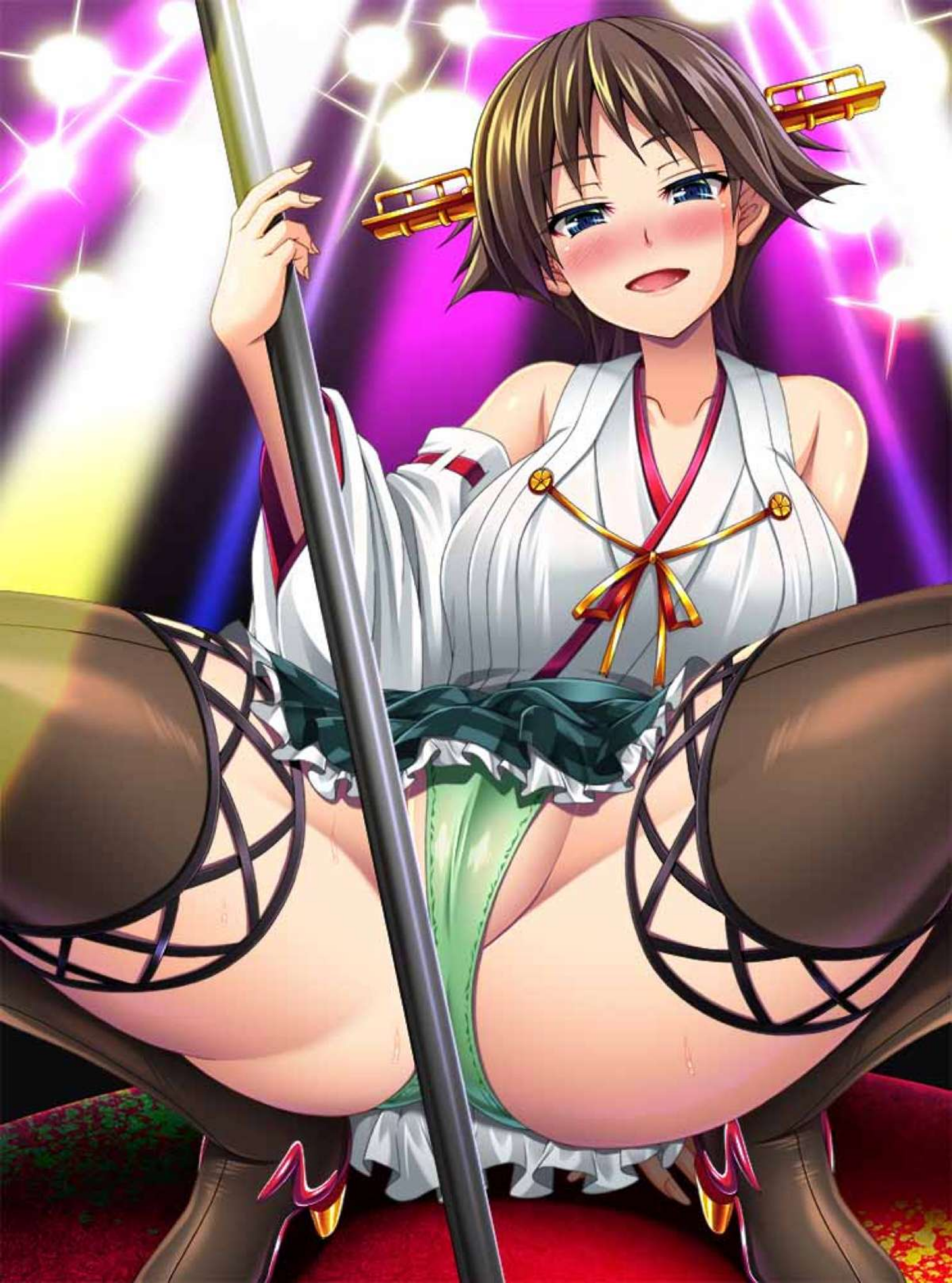
逐駆一十六策

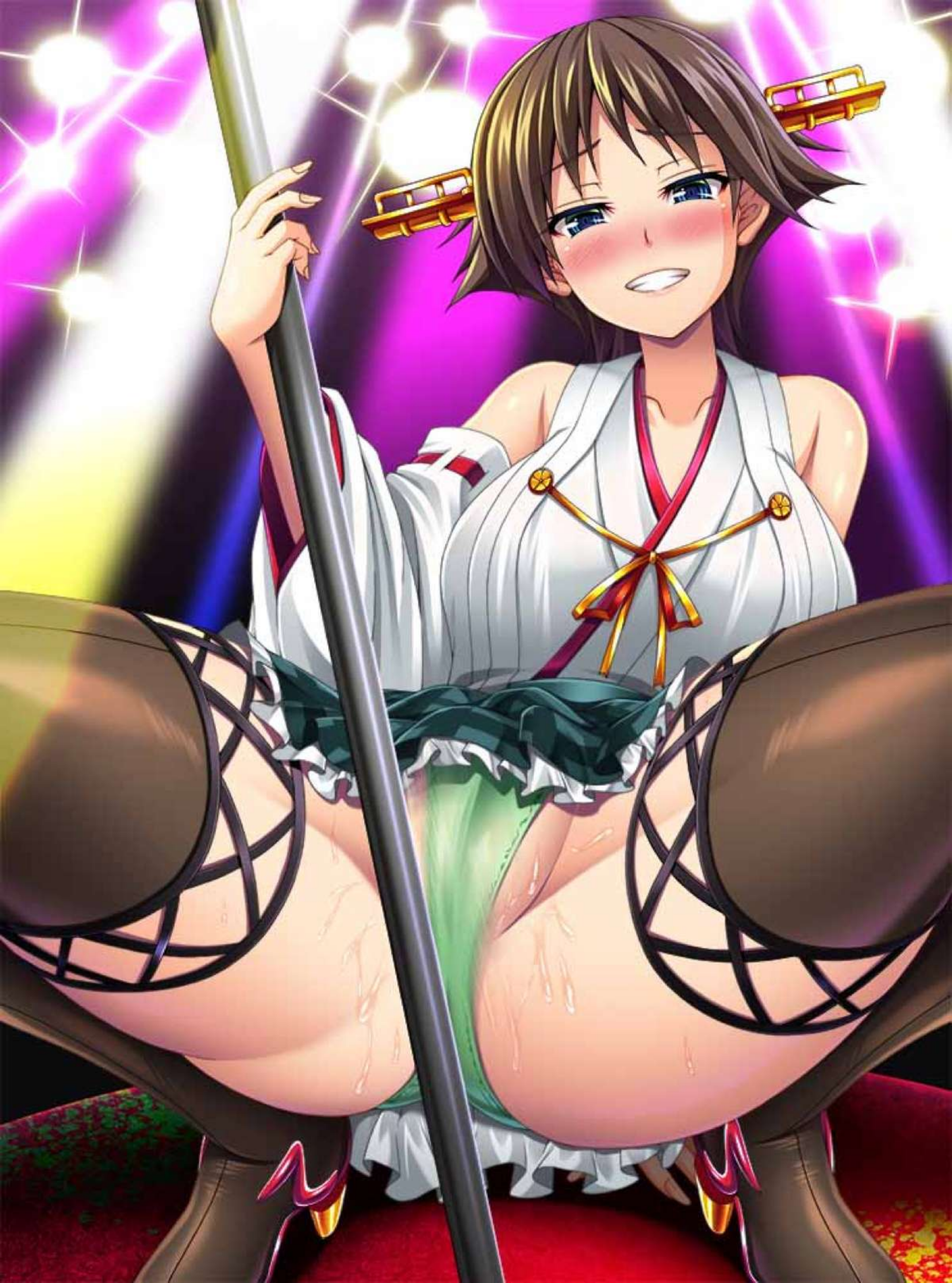
逐駆一十六策

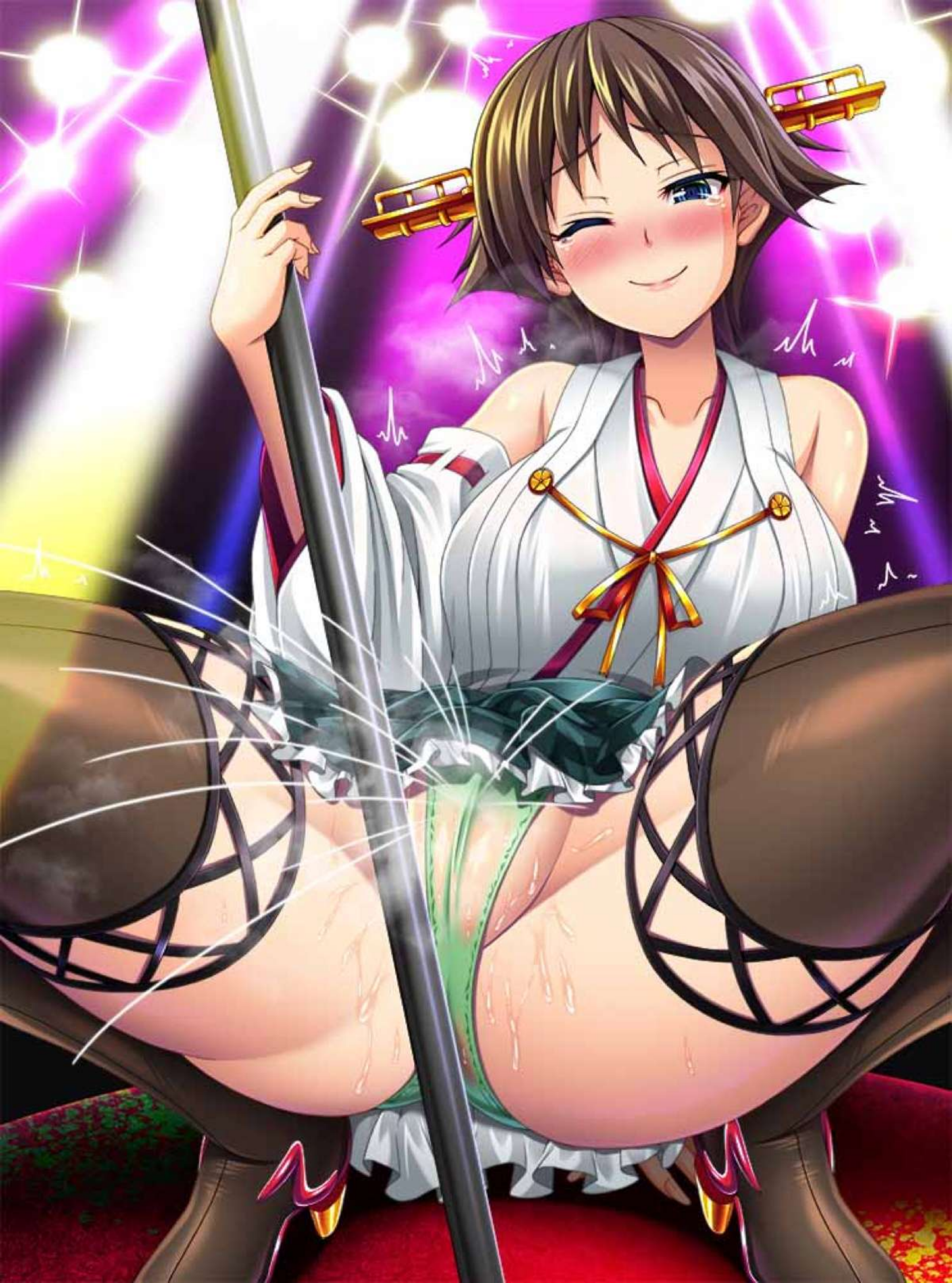
逐駆一十六策

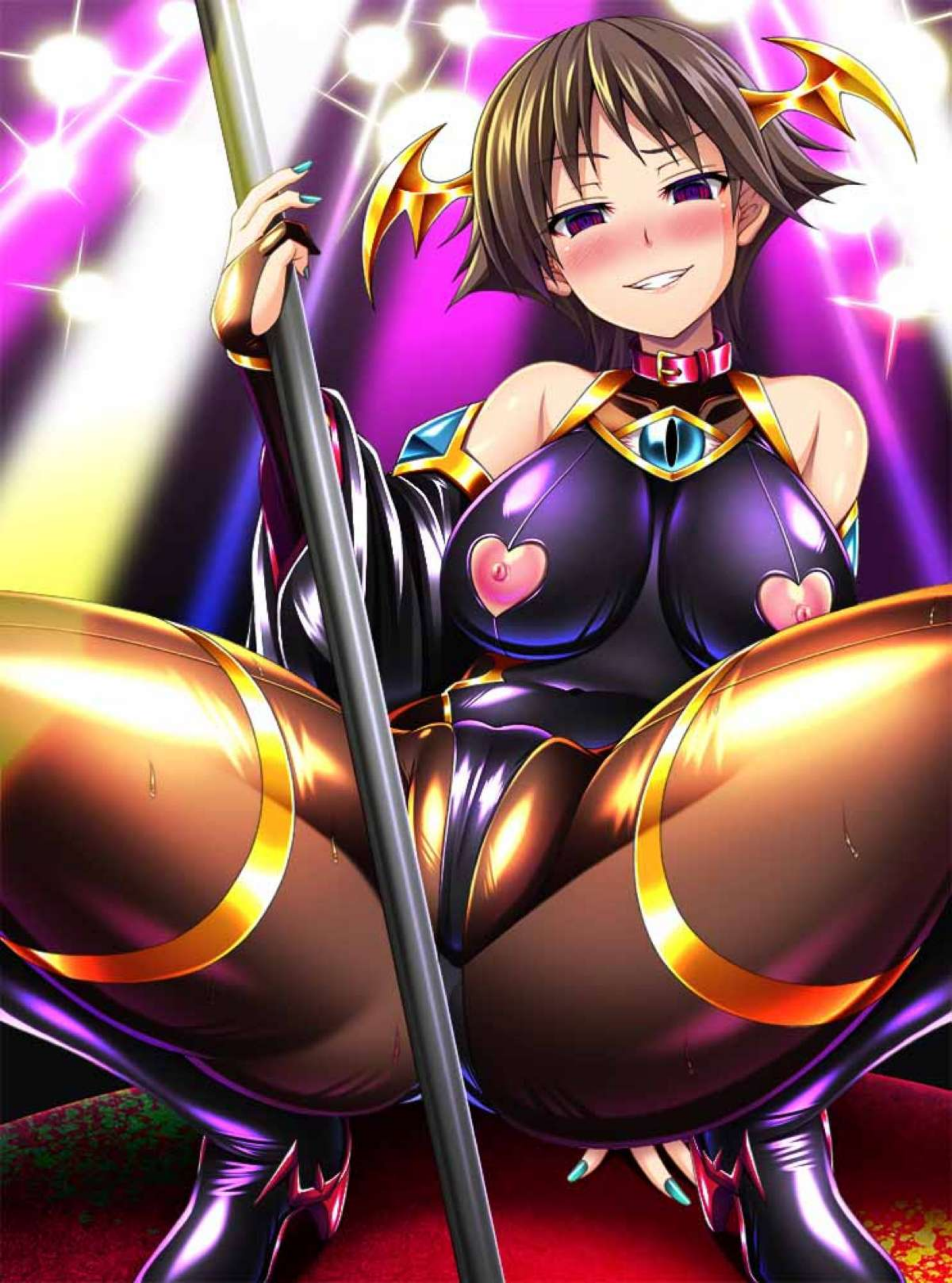
ん？
ん？
ん
ん～ん～ん～
ん～ん～ん～

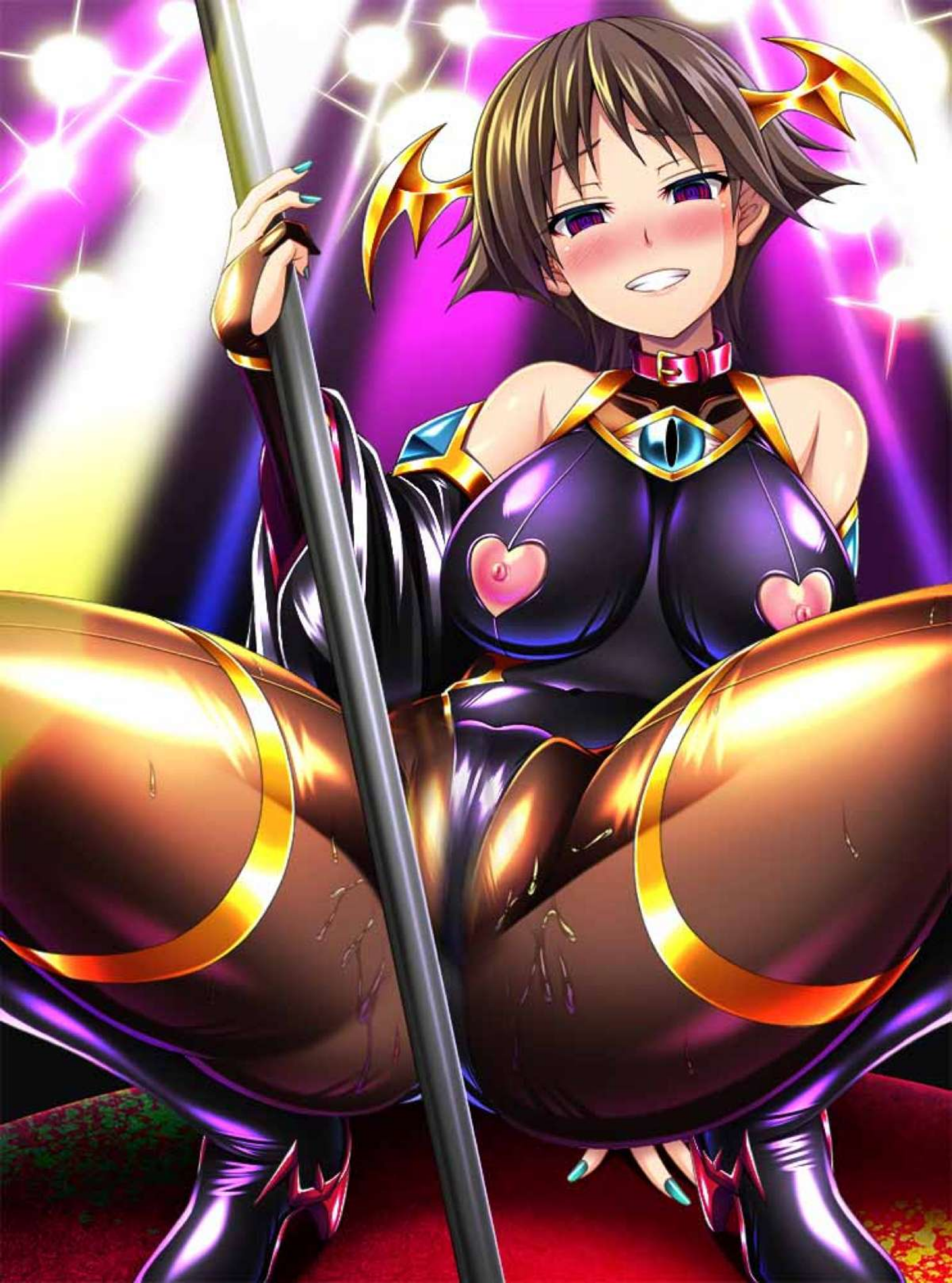


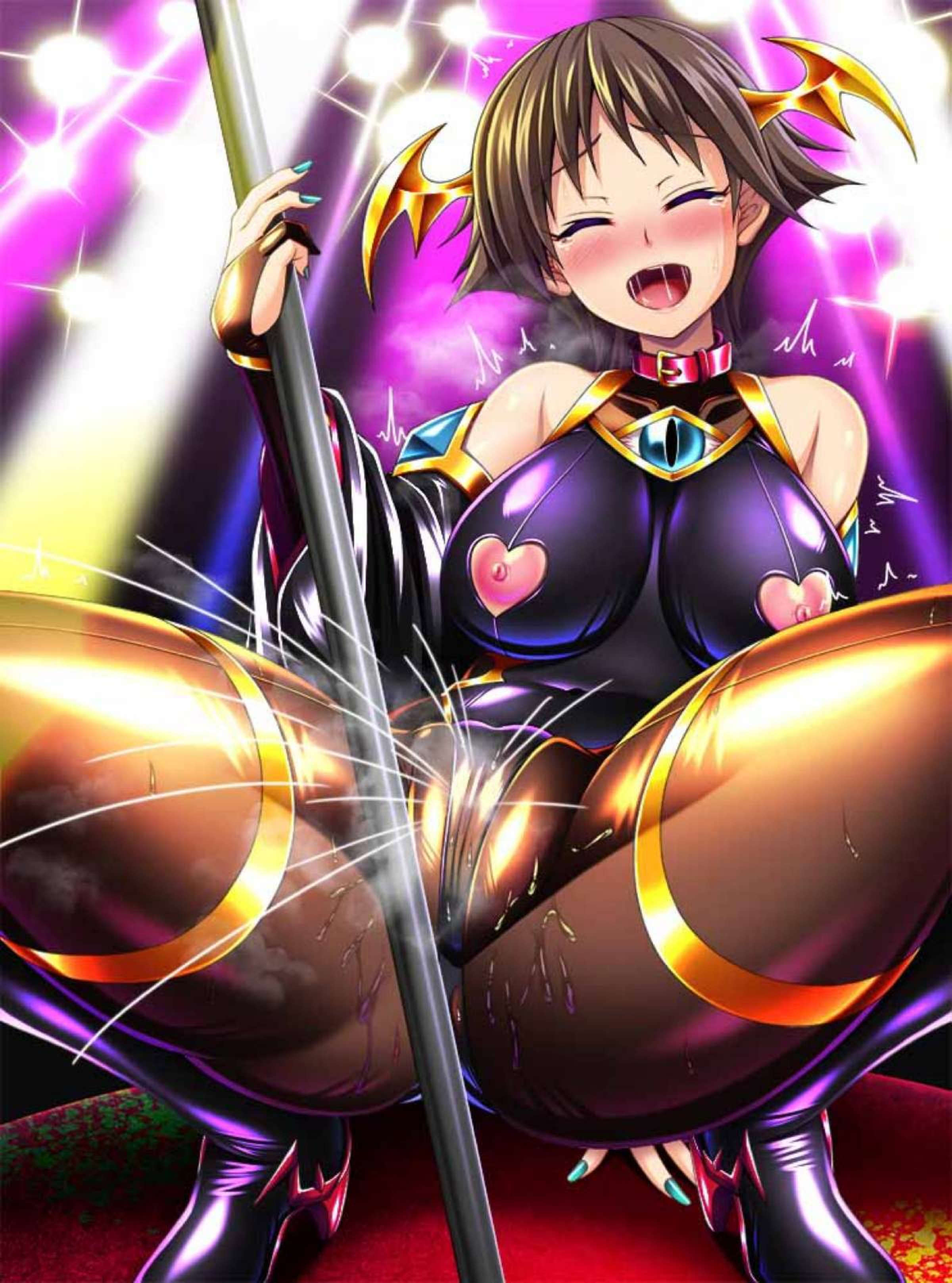


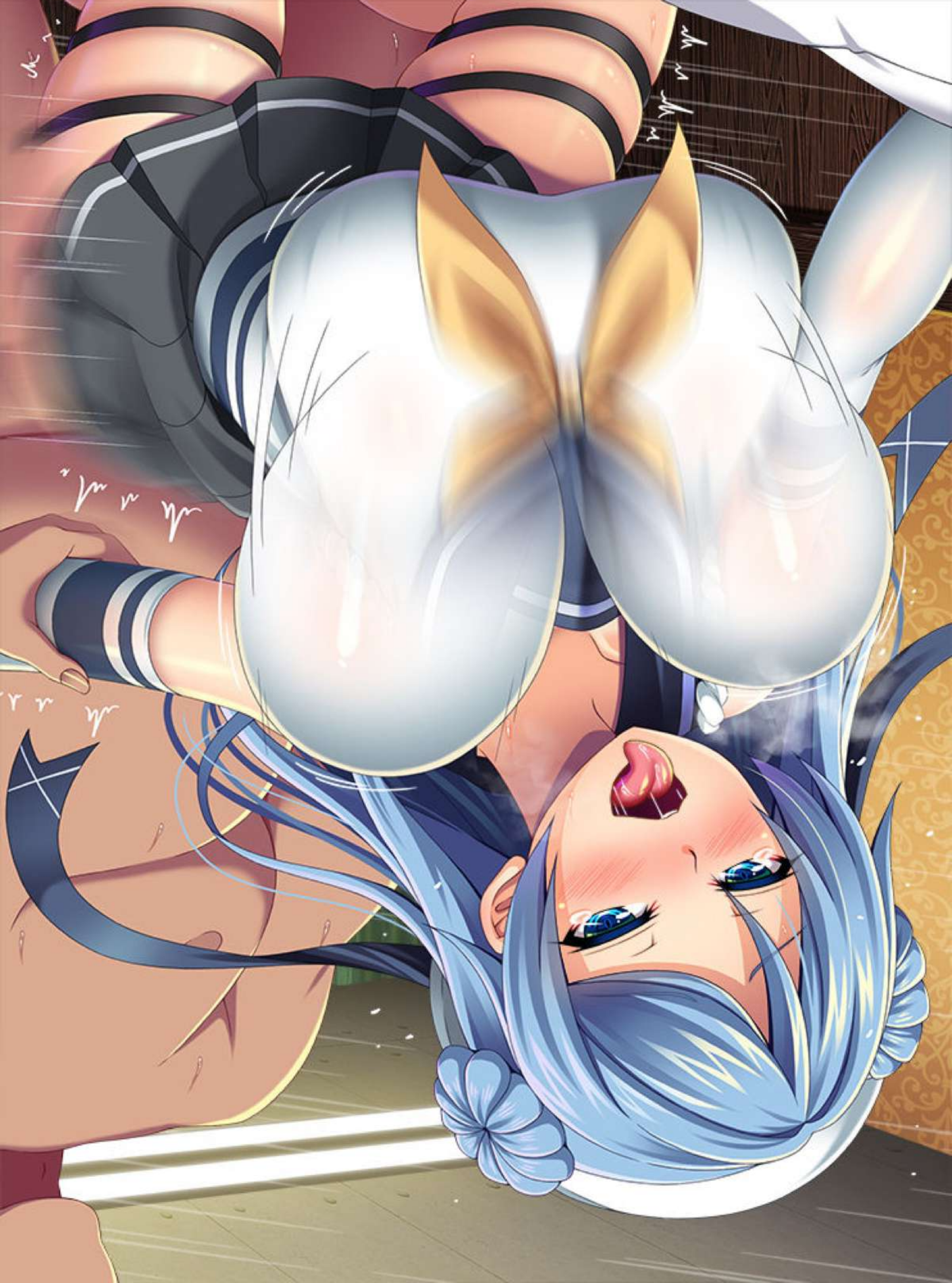












REC

REC

REC

REC

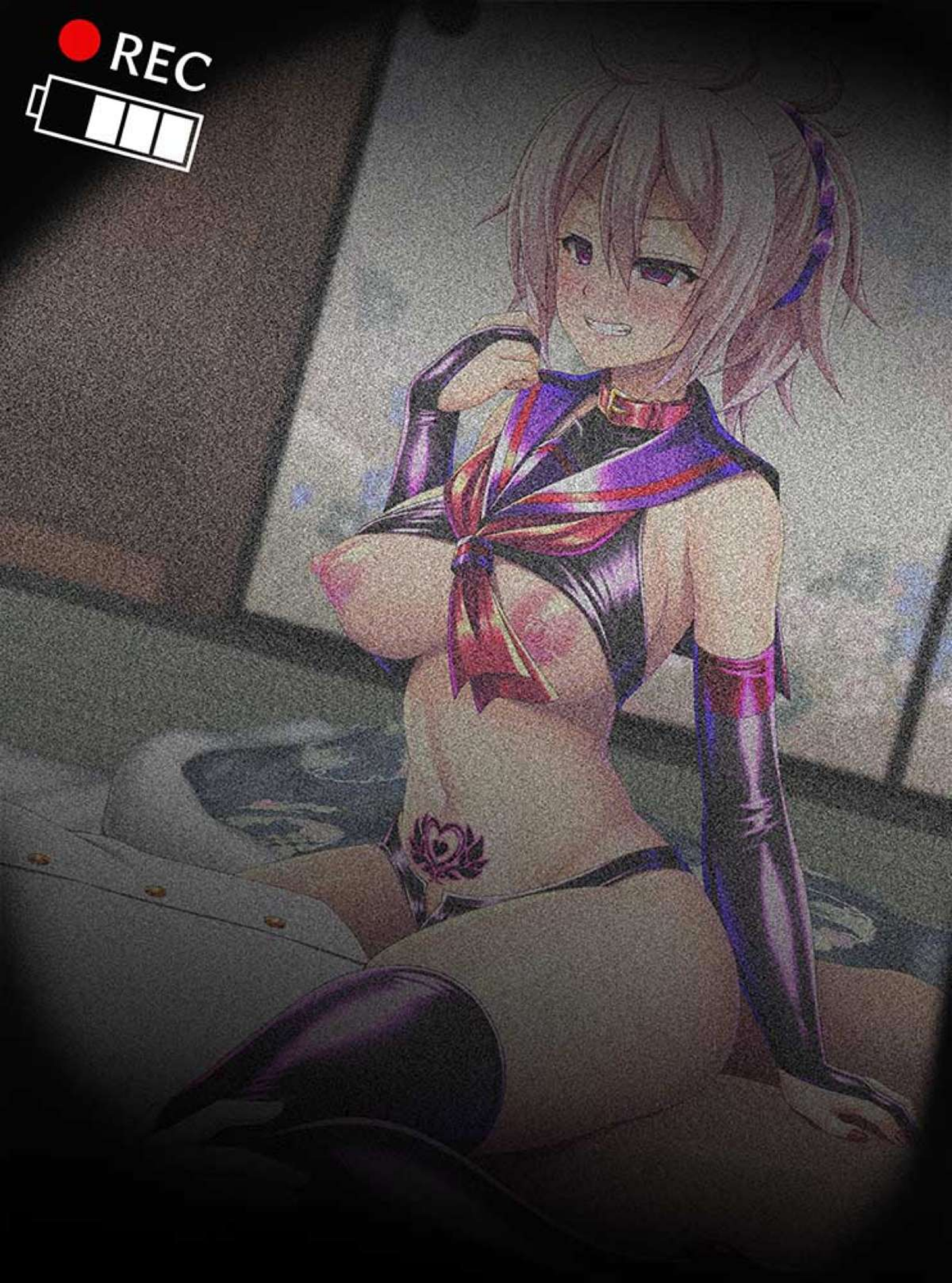
REC

REC

REC

REC

REC


REC